

「大サンドヨモギの葉は細かく刻み——……」

（あ——……えっちしたい……）

ミイは片肘をついて、視線を黒い塊に向けた。

魔法薬学の授業中。教卓に立つセドワールは黒いローブを翻しながら、淡々と上級治癒薬の作り方を指導している。黒く長い髪を揺らし、眉間に皺を寄せて、その美しい顔をいつものように不機嫌そうに歪ませ、生徒たちを睨めつけている。背が高く骨格のしっかりとした大きな体はどこも曲がることなく上品にしゃんと伸びている。一目惚れした、セドワール・グレイスたる姿に見蕩れながら、ミイは胸の内で激しく悶々としていた。

（ああ……もう……ムラムラする……っ）

ホルモンバランスのせいだろうか、朝からミイの身体の奥は熱を帯び疼き続けていた。しかし、朝っぱらから、しかも同室の親友・サシェがいる空間で自慰をするわけにもいかず、まさか学校のトイレの個室でそんな欲望を発散するわけにもいかない。その持て余した身体の疼きを、ミイは四限目のセドワールの授業までずっと引きずっていた。

そして今、教壇に立つ秘密の恋人・セドワールの端正で冷ややかな顔や姿を見つめていると、そのシャツやスラックスの中に隠している彼の身体や彼と重ねたセックスの記憶が勝手に脳裏に蘇る。程よく筋肉がついていて屈指の魔法士たる逞しい肩や腕、引き締まって筋肉の筋が浮かんだ腹。その雄々しさに抱

きしめられるのはいつもたまらない安心感と心地良さがある。そして、よく生徒に皮肉を飛ばすその口。冷徹なその唇は、二人きりになればミイに甘く愛を囁きキスを落とす。ベッドの中に入ればミイの胸の突起をいやらしく吸い上げ、濡れた長い舌でミイの身体をねっとり舐め回すことなど、一体誰が想像し得るのだろうか。そして、いつもミイに対してひどく興奮し反り立つ、太くて長い極上のペニス。セドワールのペニスはひどく支配的で、中に挿れられればその圧倒的な質量にミイの身体は屈服してしまう。密着した膣壁を捲らんほどに激しく擦られ、ポルチオをその先端で挟まれ、拳句の果て、射精のたびに子宮口をこじ開けられ否応なしに中に注がれる。彼はミイを溺愛し、照れ隠しにぶつきらばうに振る舞う時でもその根底にはいつだって優しさが溢れているのに、そのペニスだけは大衆の面前の

彼のように高圧的で、そのギャップが堪らないのだ。

一昨日も彼の部屋で甘い快感を啜っていた。その余韻が身体を駆け巡る。セドワールの顔を見るたびに、行き場のない欲求はさらに煽られ、掻き立てられていく。

体内のうねるような疼きに、ミイはもういい加減耐えられなくなっていた。制服のスカートに隠された自身の秘部へと視線を落とし、じつとりと濡れた感触を誤魔化すように、すり、と太ももをそつと擦り合わせる。

（あと少し……この授業が終わればやつとお昼休みだ。寮に戻って一刻も早くオナニーしよう……本当はオナニーより、セドとえっちしたいけど……おちんちん欲しい……）

太ももをもじもじと擦り合わせながらそんな淫らな考えに頭が支配されていたその時、頭上から冷え切った声が降ってきた。

「——お前、私の話を聞いていたか？」

ハッと顔を上げると、周囲の生徒たちはいつの間にか必死に手元の調合鍋をかき混ぜ始めており、ただ一人それに出遅れていたミイの目の前には、音もなく歩み寄ってきたセドワールが立っていた。

彼の表情は完全に『教師モード』そのもので、冷徹さを湛えてミイを見下ろしている。プライベートでは彼女を溺愛し甘やかすセドワールであっても、教師として彼女を正しく導き卒業させなければならぬという強い使命感と、目の前にいる自分以外の何かにうつつを抜かしていた嫉妬から、授業を疎かにしているミイを叱りつけるその目つきには微塵の容赦もなかった。

愛おしい男が振りかざすその容赦ない冷徹さに、ミイは冷や汗をかきながらも、どうしようもなく胸を射抜かれる。一昨日のころけるような甘い愛の記憶とは違う、かつての報われない片思い時代を思い出させるその冷ややかな視線に、背中がぞくりと粟立ち、妙な興奮が下腹部を熱くさせた。

「ご、ごめんなさい……っ！」

愛欲で満たされそうになる頭に必死に理性を引き戻し、ミイは慌てて大鍋へと向き合った。鍋の方に向いたミイの横顔にセドワールは嫌味つたらしく言葉を投げかける。

「私の授業を聞かずに物思いにふけるなど、余程その内容が大切なのだろうか？何を考えていた？」

普段なら見蕩れるように自分を見上げ熱心に授業を聞いているミイが、今日は上の空でぼーっと何かを考えて自分の話を聞

いていなかった。そのことに強い苛立ちを覚えたセドワールは薄紫色の瞳を細めると、執拗にミイを口撃し始めた。

「いつ、いえ、なにも考えていません……っ」

「では、お前の頭は授業を聞かず何も考えない空っぽの頭なのだな？ そんな頭になんの存在意義があるのかね？」

「ごめんなさい……っ」

傍から見れば、陰湿なグレイス先生がまた一人の生徒をチクチクと嫌味で虐げているだけの光景に映るだろう。しかし、その真実は全く違っていた。何かに気を取られて自分の授業を疎かにし、あまつさえ自分へ熱視線すら向けなかったミイに対して、執着深い男がただ募らせた独占欲と苛立ちをぶつけているだけなのだ。

ミイは、その隠された彼の本心を痛いほど理解していた。だからこそ、公の場で投げかけられる片思い時代を彷彿とさせる容赦のない嫌味に、恐怖どころか興奮すら覚えてしまう。怯えたふりをしながら見上げたセドワールの顔は、不機嫌さに拍車をかけ、どこまでも美しく冷徹だった。

（やっぱり、先生としてのセド、本当にかっこいい……！）

元々、彼のこの冷ややかな気高さに惹かれたのだ。その恋心にくすぐられるように、ミイの下腹部は先ほどよりもさらに疼きを増していく。それを悟られまいと授業に集中し始めたふりをして、ミイは鍋の中に次々と上級治癒薬の材料を入れていく。「鍋に入れるものはその空っぽの頭で本当に理解出来ているのか？」

「は、はい……っ、ちゃんと予習してきたので……」

ミイが生徒らしくそう答えると、セドワールはその表情の厳しさを变えず容赦のない言葉を叩きつけた。

「予習をしてきたから私の話は聞かなくていいと判断したのか？ 随分と賢くなったつもりなのだな、お前は」

「い、いえ、そういうわけじゃ……っ！」

ミイはチクチクと突き刺さるような嫌味を吐き続けるセドワールを潤んだ瞳で見上げた。こんなにも冷酷で、容赦なく生徒を追い詰める教師が——今まさに虐げているこの『生徒』に対して、ほんの二日前の夜には狂ったように愛の言葉を囁き、深く身体を繋ぎ合わせていたなどと誰も想像すらできない。表向きの冷徹な仮面と、プライベートで見せる底なしの執着と甘さ。その強烈なギャップが、ミイの理性を心地よく焼き溶かしている。

セドワールから向けられる冷酷な視線とねちっこい声音が、秘部を直接撫でているかのような甘美な快楽をミイの精神に与える。授業の進捗など、今のミイの脳内からは完全に吹き飛んでいた。

（今すぐセドとめちゃくちやにえっちしたい……っセドのおつきいおちんちんで犯されたい……っ）

そんなどうしようもない欲望に、ミイの頭の中は侵されている。

幸いにも、この授業が終わればすぐに昼休みだ。これまでもセドワールに強請り、昼休みの短時間で身体を重ねたことは何度かあった。今日だって授業のあとに甘えておねだりすれば、彼は眉を寄せながらも拒みきれず抱いてくれるに違いない――。

ミイの脳内は、授業が終わったあと彼にどう強請り、どんな風に愛されようか、という甘い妄想一色に染め上げられていた。目の前でぐつぐつと煮える大鍋のことなんて、朝から滾っていた性欲と、セドワールへの溢れんばかりの愛にかき消され、完全に思考の彼方へと追いやられていた。

しかしその刹那――。

「火を弱めろ……ッ！」

それまで嫌味を並べ立てていたセドワールの声が、鋭く、切迫した響きを帯びて教室に響き渡った。ハッとミイが意識を現実へと引き戻したときには、もう遅かった。ぼんやりと妄想にふけていたせいで、いつの間にか薬液を煮やす火を強くしすぎてしまっていたのだ。

「――っ！」

鍋の中の液体がグツグツグツッ！と激しい音と気泡を立てて急激に沸騰し、熱い液体がミイの顔や手元目掛けて飛び跳ねた。
「きゃ……っ」

「——プロヴェール！」

跳ね飛んだ熱い液体がミイの肌を焼くより一瞬早く、セドワールが反射的に杖を振るい防御魔法を展開させ、彼女を危険から完璧に守った。それと同時に、無言呪文で瞬く間に大鍋の火を消し止める。

ざわめく教室の視線など意に介さず、セドワールはすぐさまミイに詰め寄ると、その両肩を掴んで焦りを隠しきれない声で問い詰めた。

「怪我はないか……っ！肌に薬品がかかった感覚は……！」
「だ、大丈夫っ！全然平気です！」

目の前にいる男の青ざめた表情と震える指先を感じ、ミイは息を呑んだ。どれほど冷静さを装おうとしても、彼女が危険に晒された瞬間に彼が見せた動揺は隠しきれていなかった。

しかしミイが無事であると確信した瞬間、セドワールの顔からわずかに動揺の色が消え、怒りが混じった険しい表情へと急速に切り替わった。

「……っ怪我がないのなら、いい」

セドワールは眉間に深く皺を寄せ、自分の作業に戻るよう脅すかのごとく生徒達を一瞥した。そして再びミイを冷徹に見下ろす。

「……本当に授業に集中する気がないのだな。大怪我をしかけたのだという自覚を持て。本日はもうその鍋に触らなくてよろしい」

冷え切った声音が教室に響く。

「その代わり、本日の不始末の罰としてお前の課題は通常の三倍とする。覚悟するように」

そう冷たく言い放つと、セドワールはバサツと黒いローブの裾を翻し、それ以上彼女の顔を見ることもなく教卓へと戻っていった。

（ああ……怒らせちゃった……）

授業を聞いていないだけでなく自分の身を危険に晒したのだから、彼があそこまで怒るのも当然だ。ミイの不注意に対する怒りと、無事でよかったという安堵が入り交じった彼の背中を見つめながら、ミイは眉を下げた。

授業の終了を告げるベルが鳴り響き、他の生徒たちがそそくさと片付けをして教室から出ていく。そんな喧騒の中、サシェと、ミイの親友でありサシェの恋人であるターナーがミイに歩み寄った。

「あんた、何ぼーっとしてたの？」

「いや、まあ色々と……。」

「先生のあの目！俺、まじで震え上がったぜ。グレイス先生つてお前相手でもあんなに怒るんだな」

「うう、やっぱりめちやくちや怒ってたよねえ……。セドと仲直りしてくるから、二人とも先にご飯食べて……。」

「オーケー。まああんたに甘々の先生のことだから、すぐ許してくれるでしょうよ」

ミイは二人を見送ると、急いで自分の荷物をまとめ、教卓の片付けをしているセドワールのもとへと駆け寄った。

「あの、先生……今日は、本当にごめんなさい……。えっと……今日の授業の反省とか、その……少し、お話がしたくて……」

上目遣いでそう切り出すと、セドワールは手元をピタリと止め、不機嫌だと大きく書いてある顔でじつとミイを見下ろした。授業中の一件——不注意で自身の身に危険を及ぼしかけたことに対する怒りと、授業に集中していなかったことへの苛立ちが、まだその薄紫の瞳の奥でくすぶっている。

しばらくの沈黙の後、セドワールは忌々しそうに一つ息を吐き捨て、傍らの扉にちらりと視線をくべた。

「……準備室に入れ」

「はい……っ！」

ミイは小さく返事をする、何度も二人きりの時間を過ごしてきたその部屋に続く扉に駆け寄り、キィ、と開いてその中に足を踏み入れた。セドワールも続けてその部屋に入る。

セドワールは自身が部屋に入るとすぐに扉を閉め、迷いなく杖をひと振りして防音と施錠の魔法をかけた。しっかりと魔法がかかったことを確認すると、彼は振り返り、ミイに射抜くような鋭い視線を向ける。

「ミイ、今日のあの授業態度はなんだ」

「ごめんなさい……。その、いろいろと考え事をしちゃってて……」

二人きりになった途端、周囲の目を気にする必要がなくなっ

たせいか、セドワールの顔から教師としての冷酷さがわずかに緩む。しかし、怒りが入り混じった険しさは消えないまま、彼はさらに声を低くして嫌味を重ねた。

「何を考えていたのやら。お前は危うく大怪我をするところだったのだぞ。弱い火で、と再三言っただのに。私の言葉をひとつも聞いていないから、あんな愚劣な真似をしでかすのだ」

小言を言われながらも、ミイは内心でほっと息をついていた。彼のその言葉の裏にある「心配した」という本心が痛いほど伝わってきたからだ。

「でも……セドが守ってくれたから、怪我はしなかったよ。あのとき咄嗟に庇ってくれたセド、すごかった！ ありがとう、セド」

「な……っ」

怒られている場面であるにも関わらず、自然な流れで自分に甘い視線を向けてきた恋人に、セドワールは完全に意表を突かれてしまった。更に小言を続けようとしていた口はきゅっと閉じてしまい、苦虫を噛み潰したような、何とも言えない複雑な顔をする。ちゃんと話を聞くようにと叱るタイミングを完全に見失い目を逸らすその姿は、ミイの目にひどく可愛らしく映った。

（やっぱり、この人は私に甘い……）

胸を締め付けられるような愛しさに包まれながら、ミイは本題へと移るべく、ふっと声を柔らかくした。

「ねえ、セド……」

甘さをたっぷりと孕んだ声を零しながらミイは彼へと一歩歩み寄り、下から上へと太もものラインをなぞるように手を滑ら

せて、スカートを手のひらでたくしあげる。逃れられない誘惑を仕掛け、彼をその気にさせようとした——その瞬間だった。

コンコン……

甘くなろうとしていた準備室の空気を、無慈悲なノックの音が切り裂いた。

「グレイス先生、いらっしやいますか？今日の授業で、どうしても分からないところがあつて……」

扉の向こうから響いてきたのは聞き覚えのある女子生徒の声だった。セドワールの顔の緩みがスッと消え去り、一瞬で厳格な『グレイス先生』の姿へと戻る。

彼は忌々しそうに小さく息を吐くと、素早く杖を振って施錠

の魔法だけを解除する。そして、ちらりとミイを一瞥した。

「ここで大人しく待っている」

それだけ短く言い残すと、彼は準備室の扉を開け足早に外へと出ていってしまった。カチャリと扉が閉まる音が静かな室内に響く。

「……もうっ!」

見事におねだりの邪魔をされたミイは、不貞腐れたように、はあー、と大きなため息をつきながら、背後の壁にドサツと背中を預けた。

「あーあ、あの声……よりによってマリーだったな……ちえっ……」

セドワールに密かに思いを寄せているのだろう同級生に邪魔をされ、面白くなさそうに頬を膨らませる。

ふと扉のそばに視線をやると、先ほど準備室に入ってきた際にセドワールが脱いでラックにかけたばかりの黒いローブが目に入った。なんとなく歩み寄りローブを手に取ると、ふわつ、と葉草とインク、そして冷ややかな体温が混ざったようなセドワールの匂いが鼻腔をくすぐる。

その瞬間、午前中からずっと燻っていた下腹部の疼きが、一気に熱を帯びてむらむらと蘇ってきた。

「……はぁ……」

セドワールの指導がどのくらいで終わるかなんて分からない。すぐに戻ってくるかもしれないし、勉強のことならセドワールが断らないのでもいい事にマリーがあれこれと質問して長引けば、昼休みのほとんどの時間を奪われてしまうかもしれない。そうなればこの発散できなかった欲情を抱えたまま、午後の授業を

受けなければならぬ。午前中我慢し続けていたミイにはそんなこと絶対に耐えられなかった。

（待ってらんない！もういいや、自分でしちゃおう！）

ミイの中で淫らな衝動が理性を完全に淘汰した。セドワールのローブを握りしめたまま、彼の椅子——いつも執務を行っている、黒い革張りの椅子へとドサッと腰を下ろす。

「……セドの匂い……」

セドワールのローブを両手で引き寄せ、鼻先をぐっと押し当てて深く息を吸い込む。彼の香りと、そこに残っていた微かな体温に包まれているだけで、とろけるような高揚が背筋を駆け抜けた。

高鳴る鼓動を抑えきれず、ミイは自身のブラウスのボタンをプチッ、プチッと乱暴に外し始める。冷たい室気のなかで露わ

になつていく肌は、すでに欲情の熱で火照りきつていた。誰もいない閉ざされた部屋で、彼女は最愛の男の匂いを纏いながら、独りよがりの快樂へと歩を進める。

ミイはブラウスの合わせ目を左右にはだけさせると、ブラジャーの布地をぐっと押し下げ、ワイヤーの上にたぶん、とやわらかな乳房を露わにした。目を閉じ、セドワールの匂いが染みついたローブを顔に引き寄せながら、空いている片手でツンと尖った敏感な突起をピンッ♡ピンッ♡と上下に弾く。

「ん……♡んう……っ♡」

まずは右の突起を指先で弾き、刺激に耐えきれず左胸がもどかしく疼き出すと、今度はそちらの突起を指の腹で転がすように愛撫する。その心地よさを交互に繰り返していく。

乳首を通じて全身に広がる快感に触発され、秘部の疼きはさ

らに激しさを増していった。ミイは靴を脱ぎ捨てると、膝を折ってセドワールの重厚な執務椅子の上に両足を乗せ、熱を持った秘部を慰めるように太ももをもじもじと擦り合わせる。

（乳首気持ちい……っ♡おまんこも気持ちよくなりたい……っ♡）

脳を侵す欲望に従い、ミイはローブを乳首に擦り付けながら、片手をスカートの中に侵入させ自身のショーツのゴムに指を引っ掛けた。腰を少し浮かせお尻からショーツの生地を離すとそのままスルスルと脚を通して脱ぎ、セドワールの執務机の端の空いているスペースに抜け殻をパサリと無造作に置いた。

ミイはパンツを脱がした手を乳首に戻してピンッ♡ピンッ♡と弾くその快感を絶え間なく味わいながら、執務椅子の手すりに膝を預けるようにして、折りたたんでいた足を左右へと大き

く広げた。ショーツから解放された秘部の割れ目がくぱあ♡といやらしく開き、準備室のひんやりとした空気が熱を帯びた粘膜を直接撫で上げる。穴からは蜜がとめどなく溢れ出し、とりと濡れる感覚が肌を撫でた。

（あぁっ……♡おまんこ濡れすぎ……っ♡我慢できない……っ♡）

セドワールのローブを鼻と口に押し付け、彼の匂いを何度も何度も肺の奥まで深く吸い込みながら、ミイは潤んだ蜜壺へと指を伸ばした。くちゅ、と卑猥な水音を立てて、濡れそぼった穴に指先を押し当て、突き挿す。そのまま、じゅぷ、ぐちゅう……♡と、熱を帯びた蜜壺の深部へと指を沈めていく。

「……っはあ……あっ……♡♡」

自らの指だけで味わうにはあまりに濃厚すぎる、膣内のねっとりとした締め付け。本当に欲しいのは自身の指なんかではな

く彼の硬い熱だが、それでも飢えた肉体は正直で、勝手に腰が
ヘコヘコと動き出し、膣は指を吸い上げるように淫らにうねる。
「あぁっ……♡んっ、あ……っ♡」

指とはいえ、朝から疼いていてたまらなかった穴を刺激でき、
ミイは気持ちよさそうに声を漏らした。蜜穴へ挿し入れた指を
激しく出し入れさせる。ぐちゅぐちゅ♡と、蜜に塗れた肉が擦
れ合う卑猥な水音が、静かな準備室にいやらしく響き渡る。

「あぁ……っ♡あ、っ……♡きもちい……っ♡おまんこ、きも
ちい……っ♡♡」

目を固く閉じ、顔に押し当てたセドワールのローブから漂う
彼の体温と匂いをもう一度、胸一杯に吸い込む。セドワールに
抱かれているわけではない、本物の硬いペニスで奥を突かれる
あの圧倒的な快感には敵わないと頭ではわかっていながらも、

愛おしい男の存在を感じながらの自慰行為は、脳を焼き尽くすほど強烈だった。彼の匂い、彼の体温、彼の椅子、彼が纏う空気。そのすべてがミイの想像力を掻き立て、秘部の熱い快感へと意識を集中させるには十分すぎた。

「はあっ、んっ……♡せど、せど……っ♡」

ミイは快感を貪るようにひたすら腰を波打たせ、自らの指でぐちゅぐちゅと自身の秘部を容赦なく犯し続けた。

「お前……っ！」

驚愕が滲み出た低い声が準備室の空気を切り裂いた。

ハッとしてミイが濡れた瞳を開けると、そこにはいつの間にか指導を終え戻ってきたセドワールの姿があった。彼は自分の

執務椅子の上で、自分の愛用するローブを顔に押し当て、自らの秘部を指で犯しながら悶えている恋人の姿を目の当たりにして、目を丸くしている。いつもは冷徹な瞳が大きく揺れ、その白い頬には動揺の混じった赤みがみるみるうちに広がっていた。

「あ……♡ふふ、『せんせい』……♡♡」

もう理性を保つ気など毛頭ないミイは、ぐちゅぐちゅと卑猥な水音を立てて指を動かしながら、先ほどまで生徒を冷たく叱り飛ばしたり、生徒の質問に熱心に答えていたのである『グレイス先生』を揶揄うように、あえて甘ったるくそう呼んだ。

「お前……っ！そんなこと……っ！」

「『先生』……♡ごめんなさい……♡私、今日の授業中も、ずっとえっちなことを考えてたの……♡♡」

「な……っ！」

「おまんこが……ずっと、『先生』ので気持ちよくなりたいて、♡そればかり考えてたの……♡『せんせい』、ごめんなさい……♡♡」

赤裸々な淫言を吐き出しながら、ミイは腰をくねらせて自分の指をさらに深く激しく突き入れる。

目の前で繰り広げられる、あまりに背徳的で淫らな光景。そして何より、出会った時のように自分を「先生」と呼んで蕩けた表情を浮かべる最愛の女の姿に、セドワールの本能はどうしようもなく掻き立てられる。それに抗おうとする理性とは裏腹に、彼の視線はぐちゅぐちゅと愛液を泡立てて犯されるミイの蜜穴へと自然に吸い寄せられてしまう。きゅうつ、と締め付けるように窄まる穴の奥へ、彼女の指がじゅぽじゅぽと音を立てて出入りする様子を目の当たりにして、セドワールのスラック

スの中が大人しく収まっているわけがなかった。布越しでもその大きさが分かるほどに、ぐぐぐ、と膨らみ始める。

いつもならば『セド』と愛称で呼ばれ、その親密な響きに絆されるように教師の仮面を脱ぎ捨て、一人の男としてミイを愛する行為をするセドワール。だからこそ、ほんの数分前まで他の生徒を指導し完全な『教師』としての姿を貫いていたその直後に、あえて『先生』と呼びながら剥き出しの性欲を浴びせてくるミイに彼はひどく動揺した。

（くそっ……こんな、授業の延長のような雰囲気……！）

厳格な教師として先程まで教鞭を取っていた自分に対し、恋人とはいえ生徒でもあるミイが『先生』と呼び誘惑してくる――そんな背徳的なシチュエーションに興奮し、堪えきれず勃起してしまう自分自身に対する強烈な罪悪感が、セドワールの胸

を締め付けていた。

しかしそんな彼の葛藤や動揺を熟知し、なお欲の湖に突き落とさんとするかのように、ミイは目を細め微笑み煽る。

「んっ……ああ、っ♡せんせえ……っ♡指じゃ、もう足りないの……っ♡先生の、おちんぽで……罰与えて……っ♡♡」

ちゅぽっちゅぽっ♡と卑猥な音を立てて秘部に指を出し入れしながら、いやらしく強請る。

「っ……罰、だと……？」

掠れた声で問い返すセドワールに、ミイはあどけない笑みを浮かべて頷いた。

「うんっ……♡先生の授業聞かずに、ずっとえっちなことばかり考えてた罰……っ♡悪い生徒だから、っ♡先生の硬いおちんぽで、ったっぷり『指導』して……っ♡♡」

「……っ！」

『教師として』自らのペニスで罰を与え指導をしろ、という頭がおかしくなりそうなほど背德的な強請り文句。罪悪感とは裏腹に、セドワールの黒いスラックスの中で硬く熱を帯びたペニスは、その『罰』と『指導』に期待するようにビクンッ♡ビクンッ♡と激しく跳ね上がった。

「だ、駄目だ……っ！ミイ、お前、少し頭を冷やせ……っ」

強烈な背徳感と焦燥に、セドワールは真っ赤な顔で苦しげに眉をしかめた。しかし性交を拒絶しているその声は微かに震え、どこか焦点の定まらない薄紫の瞳がミイの身体をどうしても見据えてしまう。

ミイは、セドワールが自分の甘えと押しにどれほど弱いかを熟知していた。だからこそ、ここで手を緩める気など毛頭ない。

「せんせっ♡まだ怒ってる？♡ごめんなさい……っ♡私、すっごく反省してるの……っ♡だからね、先生がいない間もっ♡こっうやって、えっちなおまんこに、自分で罰を与えてたの……っ♡♡」

わざと見せつけるようにさらに両膝を大きく左右へと開く。

ちゅぽ……っ♡じゅぽっ……っ♡

ミイは秘部に挿し込んでいた指をあえて一回一回引き抜いては、また穴に挿し込むことを繰り返す。指が窄まった穴から引き抜かれるたびに愛液が糸を引き、どれほどねっちより濡れそぼっているのかをセドワールの脳裏に生々しく焼き付けていく。そして、ぬちゅ……っ♡と、再び粘膜のひだが指を迎え入れ窄まった穴がその指を吸い込むたびに、その指をあたたく締め付けているであろう膣の感触が、そのままセドワールの下半身

へと幻触されていく。ここに自分の硬い肉棒を押し込んだら、どれほどぬるぬるといやらしく擦れ、どれほどきつく締め付けられ、どれほど気持ちいいのかを嫌でも思い出させられた。

「……………」

愛する女からの淫らな誘惑に耐えかねて、セドワールの黒いストラックスの中では、硬く肥大したペニスが更にドクドクと脈を打ち膨らみ、痛いほどに張り詰めていく。

「くそっ……………」

恋人とはいえども、あろうことか教師と教え子という互いの立場に興奮し昂ぶってしまうペニスをどうにか抑え込もうと、セドワールはストラックスの上から手のひらを股間に乱暴に押し付けた。しかし内側から突き上げるような熱と硬さは治まるどころか、ますます激しく脈打つばかりだ。

その様子を目の当たりにしたミイの口角が、じわりと吊り上がった。

（……あともう少しで、セドは完全に我慢できなくなる……
っ）

直感したミイは自身の身体を見せつけるようにくねらせて、彼を更に煽った。

「せんせっ♡こんなに私はっ、反省してるのに……♡おっぱいも、おまんこも……もう、ぜんぜん、反省してくれないの……
っ♡あんっ♡せんせえがっ♡怒ってくれなきゃ、だめみたい……
っ♡♡」

ローブを中指と薬指と小指だけで掴んで、空いた親指と人差し指で乳首を摘み、くにくにと執拗に弄り倒す。もう片方の手ではぐしよぐしよの蜜穴に、今度は2本の指を挿し込み、じゅ

ぶ、じゅぷっ♡といやらしい水音を立てて激しく出入りさせる。
セドワールの端正な顔が、激しい興奮でどんどん歪んでいく。
その変化を逃さず見捉えたミイは、ちゅぷんっ……♡と蜜穴
に挿していた指を引き抜いた。指という肉棒を失った途端、快
感から解放されてしまった穴は、ひくっ……♡ひくっ……♡と
切なげに震える。挿入を求めるようにぽっかりと口を開いたそ
の粘膜の赤みは、そこを凝視していたセドワールをこれでもか
というほどに誘惑した。

「先生っ♡セックスじゃないよっ♡『罰』だからっ……♡だか
ら、早く、私に先生の『罰』を与えてください……っ♡♡」
甘えるような瞳で見上げながら、あたかも従順な生徒のよう
にそう強請るミイ。限界まで張り詰めたセドワールの理性の糸
がチリチリとちぎれていく。

「……罰、っ……」

セドワールの口から絞り出すように言葉が零れ落ちた。最後のひと押しをするようにミイはさらに甘ったるく、セドワールのための、そして自分のための言い訳を投げかける。

「そう……♡えっちなことばかり考えて授業を聞いてなかった、悪い生徒への罰だよ……♡♡このためだめなおまんこへの、最高におっきい罰……っ♡」

『正当な罰則』というあまりに都合の良い言い訳が、興奮と背徳感でくらくらと眩み始めていたセドワールの脳内に投下された瞬間、彼のなかに辛うじて残っていた理性の糸は完全にちぎれ飛んだ。

「……ミイ……ッ」

セドワールは彼女の名前を愛しそうに零しながら震える手を自身のベルトへと触れさせ、カチャ：カチャ：と無機質な音を鳴らしてその縛りを解いていく。

「あ……叱ってくれるの……っ？♡せんせ、っ♡♡」

期待と欲情に熱く染まるミイの瞳は、セドワールの股間に完全に釘付けになっていた。セドワールは荒い息を吐き出しながらミイの目の前へと歩み寄り、スラックスのボタンを外しチャックを下ろす。そして彼女の目の前でスラックスを乱暴に押し下げた。

「……っは、あ……」

目の前に顕になったのは、スラックスの抑えから解放されてぼろんと溢れ出すようにこぼれ落ちた大きな膨らみだった。パンツの薄い布越しに、中身が限界まで硬く怒張しているのが手

に取るようにわかる。その雄々しい姿を見た瞬間、濡れていた
割れ目は待ちきれないというように更にじゅくじゅくと愛液を
溢れさせ、その雄々しさを啜える準備をした。

「あ♡せんせ、っせんせいの、おちんぽ……っ♡♡」

「っ……いい加減その『先生』と呼ぶのをやめろ……っ罪悪感
で頭がおかしくなりそうだ……」

セドワールは、ふーっ♡ふーっ♡と荒い息を吐き出しながら、
自らのパンツのゴムに手をかけ、そのまま一気に引き下ろす。

ブルンッ！と、膨張し天を貫くようにビンビンに反り返った
ペニスがミイの目の前に完全に剥き出しになった。

「あ……っ♡♡すごいっ♡♡先生のおちんぽ♡♡真っ赤になっ
て、怒ってる……っ♡♡」

「っ……お前が、そうやって淫らなことばかり考えて、私の言うことを聞かないからだろう……っ！」

そう言いながらも、セドワールの視線は自分の股間に夢中になっているミイの表情と、ぐちゅぐちゅに濡れそぼった秘部を交互に舐めまわした。

セドワールのその圧倒的な太さ、長さ、そして今にもはち切れんばかりに反り勃起、ビクンビクンと脈打つ雄の姿に、ミイの腰は興奮のあまり勝手にへこっ♡へこっ♡と揺れてしまう。

「せんせっ♡はやくっ……♡はやく、おまんこ、っだめって叱って、♡♡」

自らのペニスを物欲しそうに見つめ腰を揺すって求めてくるミイの卑猥な姿を目にした瞬間、セドワールのペニスは限界を超えてビクッ、ビクッと自身の腹部に打ち付けそうなほど大き

く跳ね上がった。

「つつくそ……っ！」

もう我慢の限界だった。セドワールは大きな手のひらでミイの柔らかな太ももをガシリと掴み、ぐぐつと彼女の腰を引き寄せる。そして、ペニスを待ちわびてひくひくと震えるミイのいやらしい蜜穴の入り口めがけて、硬く怒張したペニスの先端をじつとりと擦り合わせた。

「この、……っ淫乱な生徒め……っ！」

セドワールは叱責を零すと、我慢の限界を迎えた硬く熱いペニスを入り口へとあてがい、そのまま、じゅぷぷぷ……♡♡と一気に最奥まで突き入れた。

「ああああん♡♡♡は、いったあ……っ♡♡」

待ち望んでいた高圧的な大きさと熱さに一気に貫かれ、ミイ

は椅子の上で背中を弓なりに反らせ、はしたなく嬌声をあげる。
「っああ……っ」

先ほどまでミイが指で淫らに遊んでいたその穴に我が身を沈めた瞬間、熱く湿った肉壁がきゅうっ♡と締めまりペニスをきつく絞る。セドワールはその強烈な拘束感に、思わず低く甘い吐息を漏らした。脳裏で蔓延っていた想像以上にねっとり絡みついてくる膣が、彼の脳髓を直接揺さぶる。

「おちんぽ……♡先生の怒ったおちんぽ、♡熱くておっきいっ……♡気持ちいいよおっ……♡♡」

蕩けきった表情でミイがセドワールを見上げてよがると、セドワールのなかに残っていた最後の自制心は完全に吹き飛んだ。
「っ……そんな可愛い顔をして、っこれ以上私を狂わせるな……!!」

打ち付け、昂ぶる感情を言葉に乗せて吐き出した。

「っ……なんて淫乱な生徒なのだ……っ！授業を、っ聞かないばかりではなく……ッ！こうして、っ教師を弄び……っここまで狂わせて……っ！」

「あんっ♡あっ♡♡ごめんなさいっ♡♡せんせ、♡ごめんなさいっ♡♡」

指の挿入も少しきついほど狭い膣を、太く長いペニスがこれでもかと押し広げ、ぬるぬると膣壁を擦り上げていく。真っ赤に膨れ上がった亀頭が膣壁をゴリユッ♡と抉り擦り、ミイの腰はビクン♡と大きく跳ね上がった。

「あああんっ♡♡そこだめえっ♡♡」

「……っ」

膣はきゅううっ♡と彼の肉棒に吸い付くように更に締まる。セドワールはペニスを圧迫された快感に思わず奥歯を噛み締めた。呼吸を乱しながら、ますます腰の動きを激しく、はやくしていく。

じゅぽ♡じゅぽ♡じゅぶ♡じゅぶ♡じゅぶ♡じゅぽ♡

腰を振る度に膣はいやらしくセドワールのペニスをしゃぶり、揺らされる身体に合わせて胸はぷるん♡ぷるん♡と上下する。セドワールはその先端でぷっくり膨らむ可愛い突起の誘惑に逆らえず、思わず片手を太ももから離して、その魅惑的な突起を摘んでくりくりと弄んだ。

「っ反省など、口だけで、っこれっぽっちも……っしてないんだろう……っ！こうしていたずらにっ、中を締め付けて…、淫らに胸を揺らして…っ！」

厳しく責め立てる言葉とは裏腹にセドワールのピストンは止まらず、ペニスは休まず膣を往復する。恋人に無理やり教師の仮面を付けられた男の底知れない愛欲と背徳が、ミイのすべてを満たしていく。

「ああっ♡してりゅっ♡はんせい、っしてりゅ♡♡ああんっ♡♡おっぱい♡あっ♡♡おっぱいもきもちい♡♡あっ♡ああんっ♡♡」

上下を同時に犯される激しい快感にミイは、たら……と唇の端から涎を零しながら、呂律の回らない口で喘ぎ狂う。じゅぽっ♡じゅぽっ♡ぐちゅっ♡と卑猥な音を部屋中に響かせながら、極太のペニスが激しく膣壁を擦り上げ、膣内の敏感な箇所をグリッ♡グリッ♡と抉り続ける。

「しつかり、反省しているのだろうか……っ！何が悪かったか、言ってみろ……っ！」

「あっ♡ああっ♡おっ♡おちんぽ♡♡じゅぎよ、ちゅうもっ♡先生の、おつきくて、あちゅい、♡おちんぽのこと、ばっかり、っ♡かんがえて、ごめんなさい♡♡♡あんっ♡あっ♡♡えっちな、生徒でっ♡ごめんなしいっ♡」

ミイは稚拙な口ぶりで謝罪しながら、肉のひだを無意識にひくひくとうねらせて、切望していた彼の極太ペニスをしごき上げる。

授業中、自分以外のことについてを抜かしていると思っていた恋人が考えていたのは、自分のペニスのことだった。その事実はセドワールの教師としての尊厳も、冷徹な仮面も、すべてをかなぐり捨てさせて、ただひたすら愛欲に溺れさせた。

「そんなことを考えていたとは、っ下品な生徒め：っ！」

「んあっ♡ごめ、なしゃいっ♡♡ごめんなさいいっ♡」

「その脳味噌が、まさか教師のペニスで、満たされてたとはな
…っ！恥を知れ：っ！」

「ごめんなさいっ♡♡あんっ♡♡あっ♡♡えっちなせいとだから
あ、♡もっと、♡もっと、おちんぽでっ♡おしおきしてえっ♡
♡」

「：チツ：罰をねだるなど、っ卑しい奴だ：っ！」

セドワールは獣のように荒い息を吐き出しながら、ミイの太ももを跡がつきそうなほどに握りしめ、椅子に押し付けるように体重をかけて腰を振る。激しく揺さぶられる彼女の身体を自分の支配下に置き、卑しい穴にペニスという鞭を容赦なく叩きつける。

じゅぷ♡じゅぷ♡ぐちゅ♡ぐちゅ♡じゅぽ♡じゅぶ♡じゅぶ♡

「っこうして罰せられるために、わざと、っ授業を聞かなかったのではないか……っ!？」

荒い息の合間に吐き出されたセドワールの糾弾は、もはや怒りではなく、快感に狂いかけた男の誘いだった。ミイは蕩けた頭で、さらに彼が昂るように嘯いた。

「あぁっ♡♡そう♡♡そうれすっ♡♡せんせ、にっ♡おっきい、おちんぽでっ♡♡めちゃくちやにっ♡♡怒られたくて、♡♡っあ♡♡」

ミイは頭の芯が痺れるほどの快感で、涙と涎に濡れた顔を氣持ちよさそうに歪める。彼女が責められるがままセドワールの言葉を肯定した瞬間、セドワールの体内が沸騰したようにカッ

と急激に熱くなった。

「っ——！」

セドワールは、ミイの身体へと深く覆いかぶさり、椅子の上でセドワールに完全に押し潰され身動きが取れなくなったミイの割れ目へとガクガクガクガクッと激しく腰を振った。とろとろに蕩けきった膾にペニスが激しく出入りし、ぢゅぷぢゅぷぢゅぷぢゅぷ♡♡と途切れることのない水音がなり続け、ギツギツギツギツと椅子が軋む。

「あああんっ♡♡はげしっ♡♡おっ♡♡おまんこきもちいっ♡♡おまんこきもちいっ♡♡せんせ、のっ♡♡おちんぽで、♡ああんっ♡♡あ、♡ぐちやぐちや、に♡されてるうっ♡♡」

「っ教師のペニスに執着し、犯されて下品に鳴き叫び……っなんて最悪の生徒だ、貴様は……っ恥ずかしいのか……！」

「あっ♡ああんっ♡っはじゆかち、っ♡♡はじゆかし、ですっ♡♡あっ♡♡おちんぽしゅごいいっ♡♡おまんこっ♡♡おまんこ壊れるうっ♡♡あんっ♡♡あっ♡♡」

赤裸々な喘ぎに、セドワールの下腹部は限界を迎える。散々に犯しているその中に種付けせんと白濁が煮えたぎり、根元でぐりぐりぐりぐりと蠢いた。肉の奥を突き上げるたびに脳髓が痺れ、射精の予感が全身を駆け巡っていく。セドワールの最高に伸長したペニスはミイの奥深くまで侵入し、その熱い亀頭が何度も何度も子宮口を突き上げ押し広げて、鈴口を侵入させた。まるでその中に射精させろと言わんばかりの支配的な侵入に、ミイの身体がガクガクと激しく震え始め、快感の頂点がすぐそこまで迫る。

「あぁっ♡♡おくっ♡♡おぐだめえっ♡」

「っ嘯くな…っ欲しそうに吸い付いて…っ！気持ちいいと素直に吐け…っ」

「あ♡ぎもちいっ♡♡おぐ、ぎもちいいっ♡♡いぐっ♡♡いきそっ♡♡」

「っちゃんと言えていい子だ…っ、気持ち良いんだな？」

「っ♡うんっ♡せんせ、♡いっちゃんぐっ♡♡いっちゃううっ♡♡おまんこ、ぎゅーっしててるうっ♡♡」

「あぁ…っ、可愛い…っほら…っ果てるか？」

「いくっ♡いくっ♡♡あゝっ♡だめっ♡♡イグッ♡♡イグッ♡♡イグイグウツツ♡♡」

全身を駆け巡る絶頂の予感にミイが声を一段と高くした。顎をあげて腰を反らせ、膣がビクビクと痙攣し始めたその瞬間、

セドワールは奥歯を強く噛みしめ、膣を激しく犯していたペニスをじゅぽお…っ♡と、音を立てて一気に引き抜いてしまった。

「あ…っ!? んえ…っ!?」

満たされていた熱を急に失った蜜穴は、ぽっかりとその赤い口を開けたまま、ひくっひくっ♡と切なく痙攣を繰り返す。

「な、なんで…っ? やだ…っせど…っおちんぽ挿れて…っ!」

絶頂寸前で放り出されたミイは、最高潮を掴み損ね、もう一度ペニスを強請るように腰をビクン♡ビクン♡と無意識に跳ね上げる。

「はあっ…はあっ…」

セドワールは、限界まで興奮しきって震える自分自身の身体を必死に抑え込むように奥歯を噛み締め、荒い息を吐き出しな

がら肩を激しく上下させていた。彼の雄々しいペニスは、挿入の快感に熱を帯びて醜いほどに腫れて反り勃ち、ミイから溢れた愛液と自身の先走りをたっぷりと纏って、ぬらぬらと淫らに光り輝いている。寸前で射精できなかったその先端からは、とろり、と重い粘液の雫が零れ落ちた。

「っはあ…っ、このまま果てさせるなど…そんな甘いこと、するわけないだろう…っ授業を聞かずに、っ欲情していた罰だと言ったのは、お前だぞ」

「ち、ちが…っ！罰って、そういう意味じゃなくて…っ！」

快感を寸前で断たれたパニックと欲求不満に涙をにじませるミイを他所に、セドワールは昂りきった本能を隠すように冷酷な『グレイス先生』の仮面を無理やり顔に貼り付け、冷たく言

い放った。

「なんだ、っ不満か？……っはあ……っ教師の与える罰に文句を垂れるのなら、っこのまま午後の授業が終わるまで、生殺しのまま放置してやっても、いいのだぞ……っ」

理不尽でありながらも、最高にそそる残酷な『罰』。セドワールはその冷徹な眼差しの奥に隠しきれない熱を宿していた。

「っや、やだっ！やだ、そんなの嘘……っ！せどっ！」

絶頂寸前で放り出された挙句、このまま放置されるかもしれないという恐怖と、満たされない下半身の猛烈な疼きに、ミイはセドワールの身体に腕を回しすがりついた。

「『先生』だろうが……っ教師を挑発し、挙句の果てにこれほど反抗的とは、まったくいたただけん。やはり、もう少し頭を冷やすための罰が必要なようだな……っ」

嚴格で冷酷な『教師』の仮面を完璧に被り直したセドワールは絡みつくミイの腕をやさしく解き払うと、苦しげな荒い息を押さえつけ、ビクンビクンと脈打つ大きく膨れ上がったペニスを、パンツ、そしてスラックスの中へと無理やり押し込み布地で覆い隠していく。その現実的な動作が、この甘く淫らなセックスの終わりを告げる。その残酷な事実はミイを絶望のどん底に叩き落とした。

「っうそ……っ！ほんとに、これで終わりにするの!?ねえっ、そんなのやだ……っセドもまだイッてないでしょ……っ」

ミイは縫りつくように、すっかり隠されてしまった股間へと手を伸ばそうとする。しかしセドワールはミイの手が股間に触れないよう、すっと体を避けた。

「いやっ、せどっ……セドのおちんぽじやなきや、いやなの……っ！いけないのっ……！」

ミイは涙と欲情で濡れた瞳をセドワールに向けながら、じんと疼く蜜穴へと指を突き入れた。

ぐちゅ、ぐちゅ、ぐちゅ……っ♡

「せどっ♡せど……っ♡お願い……っ♡おちんぽちよーだい……っ♡」

未だ熱を持ちヒクつく穴に必死に指を出し入れするが、先ほどまで自分の奥深くを穿ち膣を満たしていたセドワールの圧倒的な大きさと快感には到底及ばない。満たされない焦燥と、途方もない虚しさが子宮を震わせ、ミイの声は情けない喘ぎからか弱い嘆きへと変わっていく。

服の中でパンパンに膨れ上がり、果たせなかった射精を求め

るようにペニスが猛烈に疼いている。彼は欲望に抗うように顔を逸らし、『厳格な教師』らしく必死に荒い息を落ち着かせた。
「だから……っ『セド』ではなく『先生』だろうか……っお前がこのごっこ遊びを、始めたんだろう……っ」

絞り出すような、ひどく苦しげなその声。

ミイは、彼が自分を突き放しながら、彼自身もまた限界ギリギリで耐えていることをその溢れ出る色気から感じ取っていた。
——しかし、どれほどその姿に滾ろうとも、ここで終わってしまうのだ。セドワールの頑なな態度は、これ以上もう抱いてくれないのだということ物語っていた。

「イきたい……っ！おまんこ、イきたいよおっ……！」

もう指なんかではごまかせない。極上の快感を掴み取る寸前で止められたヒリつくような苦痛を抱えながら、ミイは濡れた

指を引き抜き力なく背もたれに体を投げ出した。

そのあまりに切なげな懇願の声を聞いた瞬間——セドワールのスラックスの中で、ペニスがビクンッ♡と大きく跳ね上がった。

「……つくそ」

愛しい女の悲痛な声にたまらない気持ちになる。セドワールもまた、今すぐにでもその熱く締め付ける中に突っ込み、狂ったように腰を振り、彼女を果てさせて自身も射精してしまいたいという欲望に侵されていた。しかしその愛欲よりも、彼のサディスティックな欲望が勝ってしまった。絶頂出来ず、自分のペニスが欲しいと縋り付き、穴をひくつかせながら嘆くミイの姿に背筋がゾクゾクと粟立つ。ひどい興奮が全身を駆け抜け、顔を背けてぶると身体を震わせた。セドワールは抑えきれな

い狂おしい衝動を吐き捨てるように、低く唸る。

「っ罰に耐えれば、褒美をやる……っ」

「……え……？」

熱を持った下半身を放置され、もうこれで本当に終わりなのだとは絶望していたミイの脳内に、セドワールの妙に甘やかな声が落ちてくる。予想外の言葉に、ぽかんと口を開け言葉に詰まった。

セドワールはゆっくりとミイの方へと向き直った。自らの手でペニスをストラックスのなかにしまい込み、形の上ではセックスを自身の判断で終わりにしたはずのその男の顔は、その行為とは裏腹に狂おしいまでの興奮と征服欲に満ち満ちていた。

「今の、満たされない疼きを抱えたまま放課後まで過ごすのが……お前への罰だ」

「っやだ！そんなの：っ」

「っ最後まで話を聞け！っ放課後、その状態で再び愛し合えば……っお前が味わう快感は、今の比ではないだろ……っ罰を耐えれば、褒美があるから……」

それはミイが思い込んでいた『生殺し』という罰ではなく、『お預け』という最も残酷で、しかし同時にミイの性欲と執着を底なしに煽り立てる背徳的な甘い罰だった。

「ひっ……♡そんなの、ずっと、せんせえのおちんぽのことしか考えられなくなっちゃう……っ♡」

放課後、疼ききった秘部と肉棒を再び絡ませ合う、という唆る蜜月を約束されたミイの秘部はきゅん♡と疼く。『生殺し』ならば、放課後までの間にその熱を諦めることも出来ただろう。しかし、放課後に再びこの疼く穴にペニスが入ることを

予告されている『お預け』ならば、その想像を絶するであろう快感に期待し、このいやらしい身体は、このいやらしい穴は、ずっとセドワールのペニスを忘れられず欲し続けてしまう。

「それがこの罰の目的だ」

セドワールの薄紫の瞳には底知れない独占欲と、ミイを快感のもとで屈服させたことへの歪んだ悦楽が濁々と宿っていた。

「目の前の授業そちのけで妄想にふけるくらい私のペニスに執着し興味があるのなら……放課後を迎えるまでの間、そのことだけ考えていればよい」

冷徹な教師の仮面の裏から零れ落ちた本音は、ミイの理性を焦がすには十分すぎるほど甘美だった。

「で、でもっ午後の授業全部集中できなくなっちゃう……っ」

「午後はなんの授業だ」

「えと、変身術と、魔法史と、飛行学……」

「わかった。全てあとから私が教えてやる」

学院屈指の魔法使いは、優秀な教師は、独占欲の強い恋人は、その目を濁らせてミイを見つめた。

「だから、放課後まで好きなだけ私のことだけ考えて過ごすのだ……次はその濡れた穴を満たしてやるその時まで、絶えず私に溺れているがいい」

完全に主導権を握ったセドワールは支配に満ちた宣告を言い放つと、乱れた服を整え、冷ややかな『グレイス先生』へと完全に戻っていく。だが、その頬の赤みや微かに震える指先、そして未だにパンパンに張り詰めている股間は、彼自身もまたこの『罰』に激しく狂わされていることを隠しきれずにいた。

「っ……せんせ、意地悪……っ♡」

名残惜しそうに太ももを合わせ未だ熱を帯びている下半身を抑えながら、ミイはセドワールを見つめ蕩けきった微笑みを浮かべるのだった。

「……放課後、私の部屋に来るように」

それだけを言い残すと、セドワールはこれ以上ここに居れば自分の理性が再び崩壊すると悟ったかのように、足早に廊下側の扉を開け姿を消した。ボタン、と扉が閉まる音が、静まり返った部屋に響く。

あとに取り残されたのは、燃えるような熱と圧倒的な飢餓感を残されたままのミイ一人だった。

「……セド……っ♡」

誰もいなくなつた空間で、ミイはまだひくひくと切なく震えている秘部にそつと指を這わせた。つい先ほどまでセドワール

の太いペニスが満たしていた場所は、あまりにも虚しく、その名残の熱を帯びてじゅくじゅくと絶えず愛液を零し続けている。「こんな寸止めで……これから何時間も、放置されるなんて……っ」

想像するだけで、全身の血液が沸騰するような背徳的な悦びが全身を駆け巡る。これから放課後まで、何をしていても頭の中はあの硬い肉棒のことだけで一杯になり、割れ目を濡らし続けるのだ。そしてそれを耐えて、放課後、セドワールの部屋に入り込んだその後を考えるだけで――。

「……っ、あ……っ♡」

脳裏に焼き付いたビンビンに勃起した雄の姿。あれが、放課後の甘いご褒美の時間に、この熱くうねる膣を満たすのだ。その妄想だけで果ててしまいそうになるほど子宮の奥がキュンと

締まり、ミイの身体は震えた。これ以上指で慰めてしまつては、放課後のご褒美が台無しになつてしまう。そう理性が告げているのに、濡れそぼった秘部は「もつとちようだい」と疼いてたまらない。

「……はやく、放課後になつちやえばいいのに……っ♡」

とろとろと止めどなく零れる蜜をそのままに、ミイは興奮で乱れる息を整えながら、セドワールが去つていった扉を見つめた。極限の焦らしとその後訪れるであろう最高の絶頂への期待に胸を焦がしながら、彼女は机の上に放り出されていた自分のショーツを拾い上げ、名残惜しそうに、脚にゆっくりと滑り込ませるのだった。

放課後が訪れるまでの数時間は、ミイにとって甘く、そして狂おしい拷問のようだった。

脳内を支配しているのは、ただ一つ。放課後、あの薄暗いセドワールの私室で、彼の硬く熱いペニスが再びこの飢えた蜜穴に突き立てられるという、それだけの妄想だった。

脳内のイメージを実体化させる高度な技術が求められる変身術の授業では、その弊害がダイレクトに現れた。脳裏にこびりついて離れないセドワールのペニスの形状や、彼自身の姿があまりにも鮮明すぎて、呪文を唱えた瞬間にうっかり変身対象が『それ』に化けてしまうのではないかと怯え、ミイは一度もまともに呪文を口にすることができなかった。

普段は優秀で真面目な生徒である彼女が突然の失速を見せたため、担当のグランヴィル先生は訝しげに首をひねったものの、

「どこか体調が優れないのでしょうか」と解釈し、幸いにも厳しく咎めることはなかった。

続く飛行学でも、その精神状態は改善するどころか悪化していった。

生徒たちがそれぞれ箒に跨り高度を競う中、ミイは空をふらふらと漂いながら、自分の箒の柄をぎゅっと握りしめ、じくじくにとろける割れ目にその柄をぐり♡ぐり♡と押し付けてしまふ。危うく青空の下で声を漏らしそうになり、ぶるりと全身を震わせた。

そして――廊下の曲がり角。教室を移動している時、運命の悪戯か、セドワールの姿が視界に入った。

すれ違いざま、ミイの視線は漆黒のローブに包まれた彼の股間へと吸い寄せられた。あの布地の向こう側に隠された凶暴な

熱と硬さが脳内を支配し、蜜穴がきゅんっ♡と蠢く。ミイのその視線に、セドワールが気付かないはずがなかった。冷徹な仮面をまとして歩いてきたセドワールは、自分の股間を見つめるミイの湿った視線に気付いた瞬間、腹の奥がカッと熱く煮えたぎった。彼女の頭の中が自分のことで埋め尽くされているのをその瞳から完璧に読み取り、セドワールはぐっと喉を鳴らした。

（そんな物欲しそうな目を、隠そうともせず……）

ミイの視線が上がり視線を交わしたのはほんの一瞬だったが、そのすれ違いの瞬間に交わされた熱い共鳴だけで、ミイの秘部は火照り放課後へのカウントダウンを急かした。

「ねえ、よかったの？」

ミイの淫らな思考を瞬間的に途切れさせたのは隣を歩くサシエの声だった。

「え、なにが……？」

「いや、グレイス先生とすれ違ったのに、あんた挨拶もしないから。……まさか仲直り失敗したの？」

「ううん……」

まさか彼の股間をみていた、視線を一瞬交わして放課後の甘美な期待を互いに高め合っていた、なんてこと言えるはずもない。ミイが曖昧に口を閉ざすと、サシエは眉をひそめた。

「今日のアンタ、やっぱおかしいよ。なんかずっとぼーっとしてる」

「そんなことないよ……」

「そんなことある！何？もしかして喧嘩したの、昨日？先生、授業中もあんたに結構きつく当たってたし。大きな喧嘩でもしたんでしょ」

「ううん、本当に何でもないので……ちよつと寝不足だけだから……心配しないで、サシェ」

ミイは必死に顔を引きつらせ、どうにか自然に見えるような笑みを浮かべてごまかした。しかし、頭の中では先ほどすれ違った瞬間のセドワールの鋭い瞳と、あの重々しいローブの下で硬く疼いているはずの熱のことがぐるぐると渦巻いていて、サシェの心配そうな声すらも遠くの方でしか聞こえない。

（挨拶どころじゃなかったんだもん……セドのこと見ただけで頭がどうにかなりそうだった……）

心の中でそう言い訳しながらミイはふらふらサシェの隣を歩き魔法史の教室に入る。最後の授業終了の鐘が鳴るまでの残された時間。焦がれるような期待と全身を支配する熱に耐えながら、ミイはただひたすらその時が訪れるのを待ちわびていた。

ゴー—ーン………ゴー—ーン………

石壁を震わせるように響き渡った授業終了の鐘は、ミイにとつて長かった焦燥の時間の終わりと、待ちに待った甘美なご褒美の始まりを告げる合図だった。

その音が消え入るか消え入らないかのうちに、担当教師が「では、今日の授業はここまでとする」と告げて羊皮紙をまとめる。その瞬間、ミイは弾かれたように席から立ち上がった。バタバタと机の上の教科書やノートを雑にひとまとめにし、胸元にぎゅっと抱え込む。先程まで上の空でぼんやりしていたとは思えないほどの凄まじい機敏さに、隣の席で机の上を片付け始めようとしていたサシエはビクツと肩を揺らし、目を丸く見開いた。

「サシエ！私、放課後は用事あるから先に行くね！」

「えっ、あ、うん……?」

戸惑うサシエの返事を聞き届けるかどうかのうちに、ミイは魔法史教室の扉に駆け寄り勢いよく押し開けた。廊下に飛び出す足取りは、はやる気持ちに引きずられるように自然と早くなる。頭の中にあるのは、あの薄暗いセドワールの部屋と、そこで身体を熱くしながら自分を待ち構えているであろうセドワールの姿だけだった。

(早く……行かなくちゃ……っ)

鼓動は早鐘のように打ち鳴り、抑えきれない欲情が更に下半身を熱く濡らしていく。足早に石造りの廊下を駆け抜け、ミイはセドワールの私室へと急ぐ。

ひんやりとした石造りの廊下に響く自分の早い足音を背に、
やっとミイはセドワールの私室の前にたどり着いた。はやる気
持ちをどうにか宥めるように、トントン、と控えめに扉を叩く。
——しかし、いくら待っても中からの返事はない。しんと空
気は静まり返っている。

(……あ)

そこでミイは自分の早合点に気づいた。生徒である自分は鐘
が鳴ればすぐに教室を飛び出せるが、セドワールは違う。彼は
教員だ。授業のあとには散らかった薬品や羊皮紙の片付けをし、
危険な薬品棚に嚴重な施錠をし、質問に来る生徒がいればその
相手をしなければならない。ミイよりも先に彼がこの部屋にい
るはずがないのだ。

(そっか……まだ、来れるわけないよね……)

ミイはきよろきよろとあたりを見渡し誰もいないことを確認すると、扉のノブにそっと手を掛けた。もちろん、施錠されている。しかしミイの脳裏には、以前セドワールから密かに教え込まれた手順の記憶が蘇る。

——「私がない時に部屋に入りたい場合はこの魔術を使え」

誰にも見つからないようにミイは小さく息を潜めると、教え込まれた杖の軌跡をなぞり解錠の魔術を静かに紡いだ。微かな魔法の光が鍵穴に吸い込まれると、カチリ、と固い音がして扉のロックが外れる。ミイは重厚な扉をそっと押し開き、誰もいないセドワールの私室へと足を踏み入れた。扉を閉め、内側から鍵をかけ直す。扉の内側に一歩足を踏み入れた瞬間、そこは紛れもなくセドワールだけの空間だった。部屋に染み付いてい

る彼の香りが肺を満たし、ミイの下半身はキュンと激しく疼き出す。

（はやく……セドに会いたい……っ）

早く彼の温もりを感じたいという飢えが、ミイを大人しくさせなかった。まだ主人の戻らない部屋の中を、そわそわと落ちて着かない足取りで歩き回る。無意味にバスルームの扉を開けては閉め、セドワールの生真面目さが現れた整然とした執務机の引き出しをわずかに引いては戻す。やがてその落ち着きのない指先は、部屋の隅にある大きなクローゼットへと伸びた。

きしりと音を立てて扉を開けると、そこにはセドワールが普段から身にまといているものと同じ、煤けたグレーのシャツや漆黒のスラックスがきれいに何着も並んでいた。あまり服装に頓着のない彼らしく、どれも似たような色やデザインの服ばかり

りが淡々と並んでいる。その整然とした光景のなかに漂うセドワールの気配に当てられたように、ミイの胸はとくんとくんと高鳴った。いてもたってもいられず、ハンガーにかかっていた黒いスラックスの一着を、ずるりとクローゼットから引っ張り出す。黒いスラックスのサイドを両手で持ち上げ、ミイはそれを眺めた。

「セドのズボン……」

ただ、彼の面影に触れたくて、愛おしさからした何気ない無邪気な行為だった。しかし、昼休みの寸止めで限界まで火照りきり、理性のタガが外れかけている今のミイにとって、それは毒以外の何物でもなかった。勝手に、スラックスの股間部分へと視線が吸い寄せられていく。そこは当然ながらただの黒い布地だ。生身のような熱も、あの硬く脈打つ膨らみもない。けれ

ど、普段その布に自分を狂わせ満たしてくれるセドワールの雄が収まっているだと思つと、それだけで脳が焼き切れるような昂りが押し寄せる。

「…はあっ…♡…」

ミイの秘部は、すでに限界を超えて疼いていた。触りたい。彼の匂いと体温の残滓を感じながら、そこに触れたい。彼がない今、せめてセドワールに抱かれているような錯覚に溺れたい。その本能的な強い衝動に突き動かされるように、ミイの手が勝手に動いた。

持ち上げていた黒いストラックスの股間部分の布地を、ぐつと手繰り寄せ、自分のスカートのなかに滑り込ませる。そして薄いショーツの上から、愛液でぐちゃぐちゃに濡れそぼった割れ目へと、その布地をぎゅつと押し付けた。

「あっ……♡♡んっ……♡セド…、セド…♡♡」

濡れたクロッチ越しに伝わってくる乾いた少し硬めの生地の感触と、部屋に充満する彼の香りが、ミイの理性を完全に蒸発させる。押し付けているのは生身ではないのに、まるでセドワールにそこを押し付けられているような強烈な妄想が脳裏を駆け巡り、割れ目をそれに擦り付けるように、無意識に腰がへこへこと前後する。

「だめっ……♡だめ、♡こんなことしてたらセドに怒られちゃう……っ♡♡」

頭の片隅で、セドワールを待ちきれず一人で慰めたことに怒るセドワールの姿が過ぎるが、一度火のついた欲望の炎は、思考での制止など効かなかった。昼から続く飢餓感に突き動かされ、ミイは自らの手でその疼きを鎮めるため更に淫らな行為へ

と踏み出してしまふ。ショーツ越しにスラックスの股間部分をグリグリと擦り合わせているだけでは、今の火照りきった肉体を宥めるには到底足りない。

「っはあ……んっ、もう、やだ……我慢できない……っ♡」

吐息を漏らしながら、ミイは自らショーツをずり下ろしてラグの上に放り投げると、ソファに力なく腰掛けた。そして、恥じらいを捨て去ったように両脚を大きく左右に開き、愛液を溢れさせモノを待ち構えている自身の割れ目を露わにする。そのくぱあ♡と無防備に開かれた秘部のひだへと、スラックスの股間部分を直接押し付けた。

「っあ……あっ♡んあぁっ……♡」

生暖かい肉の割れ目に、ひんやりとした硬い布の感触が直接ねじ込まれる。昼休みに中途半端に犯され、その後もずっと放

置されてヒリヒリと熱を持っていた敏感な粘膜に、彼のペニスを包み込む布の繊維が擦れる刺激。生身ではないと頭では分かっているながらも、彼のペニスの気配を妄想し、背徳感が快感にかわる。ミイは甘い嬌声を漏らしながらソファの背もたれに頭を預け、腰をピクピクと跳ねさせた。セドワールのスラックスの股間部分は、ミイの止めどなく溢れる愛液をたっぷり吸い込んで濃い染みを作り、吸いきれない蜜を纏ってぬらぬらと淫らに湿っている。約束の放課後、本物の挿入まで待ちきれず、彼の衣服を自分の蜜で汚している。そんな卑しい事実がもしもセドワールに知られたなら——そのスリルと罪悪感すらも、今の狂いかけたミイにとっては興奮を加速させる最高の媚薬でしかなかった。

「あんっ……♡あ♡だめ、こんなの……やめなきゃいけないの
にっ……♡♡」

口では必死に否定の言葉を紡ぎながらも、手の動きは一切止められない。ぐち、ぐち、と熱い割れ目にスラックスを強く乱暴に擦りつけ続ける。

そうして、理性を完全になぐり捨てて独りの快楽に溺れていたまさにその瞬間――

ギィ……

重厚な扉が、昏く軋む音を立てながら無慈悲にも開いてしまった。

「……何を、している？」

授業の片付けを終えて戻ってきたこの部屋の主人が、薄紫の瞳を怪しく揺らめかせながら、その恥ずべき有様のすべてを見下ろした。

「あっ♡あ、んっ……ち、違うのっ……これはその……っ！」
「何が違う？」

低く冷たい、しかし微かな熱を孕んだセドワールの声が、耳に響いた。

いつの間にそこまできたのか。ミイが動揺してる間にセドワールは音もなくミイの目の前に立ち、あられもなく左右に開かれた脚の間に、冷ややかな視線を落としている。ミイの手から、握りしめられていた黒い固まりを彼は容赦なく奪い取った。そしてそれを広げた瞬間、動きがびたりと止まる。

黒いスラックス。見慣れたその股間部分が、擦り付けられ

た大量の愛液で濃く変色し、ぬらぬらと卑猥に濡れていた。

セドワールは、視線を部屋の隅のクローゼットへと向けた。

わずかに開いている扉を確認し、このスラックスが自分の私物であると確信した。彼の瞳が、さらに暗く、危険な光を帯びて細められる。

「……私の衣類を持ち出し、そんな痴態を晒しながら汚して、一体何のつもりだ？」

低い声で問い詰めながら、セドワールはぐちよぐちよに汚された愛用のスラックスを握りしめた。その布地から立ち込める、ミイの雌の匂いと自らの匂いが混ざった香りが、冷静にミイに語りかける口調に似合わず、彼の下半身を熱くしていく。

「だって……っ、セドが、」

「――『先生』」

冷徹に遮られた言葉に、ミイはびくりと肩を震わせる。

「っ……せんせいが、つまだいなくて……おちんぼ、早く欲しくて……っ、だから、その……っ」

「それで、私の衣類を自らの卑しい割れ目に擦り付けていた、と？」

セドワールは言い訳を絞り出すミイを睨めるように見下ろした。そして、彼女が座る長いソファの斜め前にある一人掛けのソファへと、乱暴にドサッと腰を下ろす。

「すぐに挿れてやろうと、私も心づもりしていたが……」

足を閉じ、彼のほうへ這い寄ろうとしたミイだったが、その冷え切った声色に身体がピタリと硬直した。

セドワールは、ミイの蜜でぬらぬらと汚れた自身のスラックスを片手で握り締めながら、底冷えのする声で言い放つ。

「——やはり、やめる」

「っ……え……？」

思考が真っ白になり、ミイから血の気が引いた。せっかくここまで耐えて極限まで高まった焦燥と期待が裏切られ、一瞬で奈落の底につき落とされるような絶望感。脳内で描いていた『ご褒美』の未来が音を立てて崩れ去り、底知れぬ絶望が全身の血液を凍らせる。

セドワールはミイを突き放すように容赦なく言い放った。

「準備室でも、そしてこの私室でも……それほどまで我慢できず、自分でそこを弄るのならば好きにするがいい。好きなだけ、自分で弄っている」

「ちがうっ……！ちがうの……っ！」

必死に首を振るミイに、セドワールはさらに追い討ちをかけるように捲し立てる。

「だから、何が違うというのだ？自分ひとりでそこを慰めて快樂に溺れたいのだろう？自分でそうやっていじっていれば、私としなくても十分なはずだ。さあ、どうした？はやくしてみせろ。お前が自分の手でどうやって乱れるのか、特等席で見届けてやる」

「やだっ……そんなの、セドのいい……っセドのじゃなきや、いやなの……っ！」

挿入はなし、自分の手で慰めろという、セドワールを待たなかった罪への罰に、ミイは唇を噛み締め、涙を浮かべながらも首を激しく横に振るしかなかった。そんな惨めなミイにセドワールは冷たく言い放つ。

「何を勘違いしている？これは、言い渡した罰に耐えられず自分で慰めたことに対する追罰だぞ。お前に拒否権があると思うな」

冷徹な断罪の言葉。それは単なる拒絶ではなく、彼女のすべてを支配し、己の意のままに調教するための絶対的な命令だった。セドワールの手によって完全に逃げ道を塞がれ、ミイはむしろ底知れない背徳の悦楽を覚えてしまう。

「うっ……♡せんせ……っ、……♡」

抗うことなど最初から許されていない。震える吐息を零しながら、ミイは言われるがままに、今度はセドワールに見せつけるように両脚を大きく広げた。犯し尽くされることへの期待に火照りきっていた秘部は既にどろどろに蕩けている。薄暗い部屋の中、無防備に開かれたその淫らな割れ目をじっと見据えた

瞬間、セドワールの喉の奥でぐくり、と唾液を飲み込む音が微かに響いた。冷徹な教師の仮面の裏で、彼の理性もまた削り取られていく。

「……ほら、はやく見せてみる。そのみつともない姿を」

命令に従うしかないミイは、震える指先を自身の熱い割れ目にそつと当てた。そして、これ以上ないほどセドワールの視線に晒されながら、濡れそぼった穴へと指を深く突き立てる。

くちゅっ……っ♡ぐちゅっ……♡

静まり返った私室に、いやらしい水音が響き渡る。セドワールの熱い視線を受けながら、ミイは快感と焦燥に溺れ、ねつとりと指を出し入れする。

「あ……っ♡あんっ……♡♡」

細い肉棒が膣内を直接かき回す。期待していたモノに比べれ

ば遥かに劣る快感にも、ミイは小さく声を漏らしながら卑しく腰を浮かせた。

セドワールは、目前で自らを慰めるあられもない姿を、冷徹な仮面の奥から熱を帯びた瞳で凝視している。

「……そうして人前で慰めるのは気持ちいいか？ん？自分で気持ちよくなれるのなら、やはり私のペニスなどいらんだろう？」

嘲笑うような、けれどどこか焦れた声音でセドワールはそう告げた。彼女の切迫感をさらに煽り立てる冷酷な尋問。ミイは指を出し入れしながら必死に首を振った。

「きもちくない……っ♡せんせ、の、♡おちんぽ、ほしい……っ♡おちんぽ……っ♡ください……っ♡」

自分の指では決して満たされない渴きを譫言のように繰り返
し、ミイは淫らな水音を立てながら、一心不乱に自身の秘部を
かき混ぜる。その赤裸々な言葉に、セドワールは腹の奥の蠢き
を逃がすが如く吐息を荒く吐き出した。

「はあ……っ」

セドワールは立ち上がり、ミイの目の前に立つと、低く色つ
ぽい響きを含んだ声で追いつめる。

「お前、廊下ですれ違う時も私の下半身ばかり貪るような目で
見つめていただろう。そんなに欲しくてたまらなかったのか
？」

「んうっ……♡♡だって、昼休みからずっと、♡頭の中♡先
生のおちんぽで、いっぱいで……♡おかしくなっちゃいそうだ
ったんだもん……っ♡♡」

羞恥も理性もすべてかなぐり捨て、隠すことなく本音を吐き出したミイの痴態に、セドワールの目はぬらりと光った。

「……そこまで執着するか」

セドワールは低く唸るような声を漏らすと、自らのベルトに手をかけた。カチャカチャ、と金属音が冷たい空気を期待に染めていく。セドワールは荒々しい手つきで自身のベルトを外すと、スラックスのボタンを弾くように外した。そのままチャックを引き下げ、下着ごとまとめてずり下ろすと、ついさっきまで冷静さを取り繕っていた男の、隠されていた凶暴が完全にその姿を顕にした。

「つ……はあ……」

冷徹な教師の仮面を一枚剥ぎ取れば、そこにあるのは愛しい恋人との愛欲に狂った一人の男だった。昼間の寸止めで彼もま

た飢えに飢え、さらに再び恋人の自慰姿を見せつけられたことで、ペニスは、ムクッ♡ムクッ♡と血管を浮き上がらせながら太く、硬くそそり勃っている。

「ああっ♡♡おちんぽ…♡すごい、おっきい…♡♡♡♡」

ミイはその雄々しい肉棒に釘付けになりながら、自分の割れ目をかき混ぜていた指の動きをさらに加速させた。腰がガクガクと勝手に揺れてしまうほどの強烈な興奮が、全身の神経を痺れさせる。

セドワールは、解放された肉棒が更に大きくそそり勃っている様をミイに見せつけながら、冷ややかな、しかし底なしに甘い声を落とした。

「そこまで欲しているのならよく見るがいい…。狂うほどに焦がれていたのだろう…」

卑しいミイを見下ろす薄紫の瞳には、理性の色ではなく、独占欲と愛欲の色が濃く焼き付いていた。

「っ♡♡先生のおちんぽ、♡もっと勃起してく……っ、♡どんなおっきくなってる……っ♡♡」

「……お前の、その姿を見て昂らんわけがないだろう」

「っ♡♡私の、私のおまんこで、興奮してるの……っ？♡♡」

ミイは自分の蜜穴に出し入れする指をさらに激しく動かしながら、目の前で脈打ち太さを増していくセドワールのペニスを貪るように見つめた。自分の身体が彼をここまで滾らせているという事実だけで、脳が溶けてしまいそうなほどの悦びが全身を駆け巡る。

「ほしいっ……♡せんせ、おちんぽ欲しいっ♡挿れてっ……はやく、中に挿れてっ……♡♡」

理性を完全になぐり捨て、興奮しきった真つ赤な顔で縋りつくミイ。しかしセドワールは、荒く熱い息を「ふーっ……、ふーっ……」と吐き出しながらも、すぐに彼女を抱き寄せることはしなかった。彼の欲情に濁った視線は、熱っぽく自分のペニスを見つめるミイの顔と、指を咥え込む割れ目とを、舐めるように交互に往復する。ぐらりと目眩がするほどの欲に耐えぐつと眉間に深い皺を寄せると、足元に落としていた自身の濡れたスラックスを無造作に拾い上げた。

「……貴様、もう忘れたのか？」

低く掠れた声音でそう告げると、セドワールは、ミイの愛液でぐちよぐちよに濡れた股間部分の濃い染みを、わざわざ彼女の目の前へと突きつけた。

「こうして私の衣類を汚し勝手に乱れていたくせに、よくもそれを棚に上げて簡単に私を強請れたものだ」

責め立てるような冷たい眼差しの中、粘液で濡れた布を見せつけられた恥辱が、ミイの興奮をさらに何倍にも跳ね上げていく。

「あ♡ごめんなさい……っ、♡せんせ、汚してごめんなさい、許して……っ♡」

涙を滲ませた瞳でミイは縋るように甘え、許しを乞うようにセドワールを見上げる。その可愛らしい姿に、セドワールのペニス は悦び跳ね上がった。

彼は再び、ミイの愛液でぐっしりと重くなったスラックスの股間部分に視線を落とす。そして、指先でその染みの中心をゆっくりと撫でた。ぬちゅ……っ、と、生地になっぷりと染み

込んだミイの蜜が粘るように糸を引いて、セドワールの指の腹を淫らに濡らし上げる。

「はあっ……っ……」

抑えきれない欲情と興奮に熱い吐息を零しながら、セドワールはその汚されたスラックスの股間部分を、自らの硬く脈打つペニスへと押し付けた。

「っ！？せんせ……っ、それ、……っ♡♡」

目の前で繰り広げられる光景に、ミイは甘い嬌声を零す。セドワールは、ミイの蜜と体臭が染み込んだ股間部分の布地をペニスに密着させ、硬くそそり立ったペニスをぐちぐちと雑に、しかし激しく擦り上げ始めた。ペニスと布が擦れ合うたびに、スラックスに付着した吸い取りきれないミイの蜜がセドワールの熱い肉棒にねっとりまとわりつく。ぬちっぬちっ♡という

生々しい摩擦の音がミイの鼓膜を揺らした。

「ああっ♡♡おちんぽっ……♡私の、っ♡♡私のおまんこ汁で……っ♡♡おちんぽ気持ちいいしてるっ、♡♡」

目の前で繰り広げられている光景に、ミイの脳髄は完全に蕩けてしまう。自分の愛液が染み込んだスラックスで、あのお堅いセドワールが自らを慰めている。その淫らすぎる光景が理性を粉々に粉碎し、ミイは自らの蜜穴に突っ込んでいた指のピストンを狂ったように速める。ぐちゅっぐちゅっぐちゅっぐちゅっ♡と、室内に響き渡る卑猥な水音がさらに大きさを増していく。セドワールは、自分の肉棒にまわりつく蜜の滑らかさを感じながら、ミイが自分のせいで酷く発情している姿を見て理性のタガが完全に外れかけていた。

「はあっ……っ、……」

セドワールの手の動きはどんどん激しさを増していく。セドワールは布地にまとわりついていたミイの愛液をペニスが全て掬いとったと感じると、スラックスを手放し、直接手でペニスを握りしめ、ねちっ♡ねちっ♡とミイの体液を塗り広げるように扱いた。自分のオナニーを見せつけられて興奮のあまり狂ったように秘部をいじり倒すミイの顔と、その割れ目からとめどなく溢れる蜜を交互に見て、それを餌にしながらセドワールはさらに激しくペニスを擦り上げた。

「…っは、……っ……」

「あっ♡あ…っ♡あんっ♡せんせ♡っんう…♡」

ミイの視線は、目の前でしごかれるセドワールの雄々しいペニスから一瞬たりとも離れなかった。ソファに腰掛け両脚を大きく開いたその目前で、セドワールの硬く反り返ったペニスが、

そしてその先端でぷつくりと腫れ上がる亀頭が激しく揺らめいている。亀頭の先の小さな穴からは堪えきれない欲情を物語るように粘り気のある透明な先走りが一筋、ねつとりと糸を引いて垂れ落ちていた。その生々しい光景に、ミイの脳天は痺れたように熱くなる。

「気持ちいいっ？♡♡せんせっ、♡おちんぽからお汁出てるっ♡おちんぽ気持ちいいのっ？♡♡」

淫らな言葉を吐きながら、ミイは自らのブラウスのボタンを乱暴に外していく。布地を左右に開き押し込められていた白い乳房を露わにすると、そのままブラジャーの布地を無理やり押し下げて、硬く尖った桃色の乳首をむき出しにした。空いている指をその突起に触れさせ、ピンッピンッと上下に弾く。それと同時に、下半身の指のピストンをさらに加速させた。

「あっ♡あんっ♡あんっ♡んっ♡う♡♡」

部屋中に響く卑猥な水音と喘ぎ声が、二人の熱をさらに煽り立てる。

自分のペニスに狂い、自らの手で胸までをも曝け出して快感を貪るミイの姿に、セドワールの脳もまた、湯だったようにくらくらしした。

昼休み、挿入の快感で射精の直前まで達しながらも『罰』だと言ってミイを我慢させるのと同時に自身も抑え込み、欲を押し殺して溜め込んでいたセドワール。発散できずに腹の底で渦巻いていた熱量と、目の前の淫らな教え子が放つ雌の匂い、そしてペニスにまわりつく蜜のねっとりとした感触が、相乗効果となってセドワールを襲う。

「っ……く……っ！」

頭の芯が真っ白になるほどの強烈な快感が脊髓を駆け上がっていく。溜め込み続けた分も放出せんと、セドワールの下腹部には堪えられないほど激しい射精感が濁流のように湧き上がっていた。

そんなセドワールのペニスは彼の興奮具合を表すようなひどく激しい摩擦に晒され、ミイの目の前で赤く腫れ上がり、脈打つたびにぎりぎり太さを増していく。

「……はあっ……っく……」

喉の奥から漏れ出た、苦しそうでありながらも官能に染まったセドワールの荒い吐息が、ミイの火照った耳を掠めた。その色気を帯びた声を聞いた瞬間、ミイの衝動が完全に爆発する。これ以上、見ているだけなど耐えられなかった。

「ん……っ……！」

ミイはソファから上半身を前のめりに突き出し、目の前で誘うように膨れ上がるセドワールの亀頭へと迷わず顔を寄せ、パクツと熱い口内へと深く含み込んだ。

「っ!!くっ……!」

不意打ちで亀頭を口腔内のねっとりとした湿り気と熱に包まれ、セドワールの足元が大きく揺らぎ、その引き締まった腰がビクンツと激しく跳ね上がる。

ちゅぷっ、ちゅうつ、ちゅぷっ……♡♡

ミイは柔らかい唇で亀頭の全体をぴったりと密着させ、吸い上げるように水音を立てながら貪りつく。さらに、敏感な射精穴に舌先を這わせ、ぐりぐりっ♡とほじるように虐めた。

「っ…、あ……っ!待て……っ、そこは……っ!」

頭をかき乱されるような強烈な快感に、セドワールはもはや

冷静さを保つことなどできなかった。彼は自分のペニス握る手をさらに狂ったようなスピードで激しく扱き上げた。幹を扱く荒々しい手の圧、亀頭を包み込む湿った唇の柔らかさと吸い付くような密着、亀頭の表面を這い回る舌の摩擦、敏感な射精穴を執拗にほじくられる鋭利な刺激。あらゆる刺激に晒されたセドワールのペニスはち切れんばかりにパンパンに膨れ上がり、血管がミミズ腫れのように浮き上がった。理性の制御などつくに吹き飛んでおり、セドワールの腰は勝手に前後に突き上げるように動き出す。

ちゅぷっ、ちゅぷっ……♡♡

セドワールが腰を動かしてしまふことで、ミイの窄まった柔らかな唇がカリ首を扱き、脳天を貫くような痺れる快感がセドワールを襲った。

「っああ……っく……っ！」

セドワールは官能に染まった瞳を細め、喉の奥から切羽詰まった声を零す。根元が強烈な射精感に襲われ、ぎゅるぎゅる♡と熱い精液を蠢かせ始めていた。

「っああ、……っ！」

ビクン、ビクンッ……と、ミイの口内を出入りするペニスが激しくひくつき、限界の臨界点に達したことを生々しく知らせる。セドワールは全身の血が逆流するような感覚とともに、ねっとり煮詰まった精液が睪丸の奥からペニスの幹へと勢いよく這い上がって来るのを感じた。

「っあ、……出るっ……！」

セドワールがかすれた切実な声を漏らした瞬間、ミイは機敏に動いた。

ちゅぷんっ……♡

名残惜しそうにミイは亀頭から唇を離す。そして、自らの両太ももを両手で力強く掴み上げてさらに大きく左右へ開き、ぐちゅぐちゅに濡れそぼった無防備な割れ目をセドワールの目の前に突き出した。

「かけてっ♡先生のあついの、っ♡おまんこにかけてっ……♡♡」

発情しきった雌の顔で卑しく精液をねだるミイの姿に、セドワールはもうそこに射精すること以外考えることができなくなってしまった。絶頂の予感に震えて真っ赤に腫れ上がるペニスを握りこみ、その射精穴をミイの割れ目へと真っ直ぐに向ける。そして、自らの手でその幹をぬちっぬちっぬちっぬちっ♡と、彼女の蜜を潤滑油にして激しくしごき上げた。

「っう……っ」

喉の底から絞り出されたセドワールの低く艶やかな声が部屋に響いた次の瞬間。

ビュ~~~~ッ♡ビュルルッ♡♡ビュルルッ♡♡ビュクッ
ビュクッ♡♡

セドワールの腰のビクッビクッと押し出すような動きに合わせて、無防備に開かれたミイの割れ目に、腫れ上がった先端から熱く粘っこい白濁が激しい勢いで放出された。

「あ♡出てるっ……♡せんせ、の、おちんぽ、イッてるっ……♡
おまんこにっ♡おまんこに精子かけてるっ……♡♡」

ミイは自分のクリトリスや穴、ひだに、セドワールのペニスから発射された熱い精液が勢いよくぶっかけられる光景を見つめ、淫語をこぼして歓喜の声を上げる。

セドワールは射精の快感に全身を震わせながら、なおも手を緩めることはなかった。絶頂の波に飲まれながらペニスをぎゅうっと力強く扱き上げ、ビュッ♡ビュッ♡と最後の一滴までかけるように射精し続けて、ミイの割れ目を自らの痕跡で完全に汚し尽くしていった。

「ああ……っ♡あついっ、おまんこあつい……っ♡先生のせーえき、……っすごい……♡♡」

ミイは焼けるように熱い白濁を自分の秘部に浴びせかけられながら、うっとりと目を潤ませて歓喜の声を漏らした。

セドワールは、はあっ、はあっ、と肩を激しく上下させて荒い息を吐き出しながら、その光景を見下ろしている。ミイの無防備な秘部は、吐き出された大量の精液によって真っ白に染め上げられ、あまりの勢いと量に黒革のソファの座面にまで、生

々しい白濁の雫が飛び散っていた。

はだけたブラウスからたぷんとした胸を露わにし、脚を開いて割れ目を精液で真っ白に汚した恋人。その淫らな姿に、射精して萎むはずのセドワールの性欲は淫らに掻きむしられ萎えることは無かった。

「……誰の許可を得て、勝手に口を含んだ……」

低く掠れた声の底で、メラ……と、理性を焦がす黒い炎が激しく揺らめく。セドワールは手を伸ばすとミイの顎を掴み上げて、その顔を強制的に自分へと向けさせた。

怯えるどころか、蕩けた顔で挑発するように微笑みミイは囁く。

「だって……せんせいのおちんちん、すごくおいしそうだったんだもん……♡苦くて、しょっぱくておいしかった……♡」

「っ……！」

その言葉が、完全にセドワールのブレーキを壊した。

「節操なしめ……まだ躰が必要らしいな」

セドワールはミイの脇に手を入れるとそのまま体を軽々と持ち上げ、部屋の壁へと容赦なく押し付けた。ミイの背中が冷たい壁に触れ、セドワールに追い詰められて逃げ場を完全に塞がれるようにびったりと捕らえられた。

「っ……せんせ、……？」

セドワールはミイの呼び掛けに何も答えず、未だ荒さを帯びる呼吸に肩を上下させながら、彼女の身体を舐めまわすように見下ろす。彼の黒い睫毛が揺れる美しさにミイが見蕩れている間にも、セドワールは再び首をもたげ始めたペニスを大きな手で扱き上げはじめた。ミイはその姿に期待で身体を震わせた。

セドワールが自分の体を餌にして、ペニスを更に大きく反り勃たせようとしている。やっと、待ちに待った挿入がくる――。

「せんせっ……♡もつと……もつと罰、ほしいです……♡はやく、ちようだい……♡」

その従順すぎるねだり方に、セドワールは艶やかに口角を歪め、低く地を這うような声を漏らす。

「……どこまでも卑しい子だ」

先ほどの射精の余韻が残る中、セドワールのペニスはミイの熱とその魅惑的な身体、そして沸き立つ淫らな匂いにあてられ、みるみるうちに再び硬く、太く、脈打ちながらそそり立っている。

セドワールは復活した肉棒を掴むと、ミイの濡れそぼった割れ目へとそれをあてがった。ミイは嬉しそうに頬を緩め、片足

をを上げるとセドワールの腰に絡めた。セドワールの首に腕を回し、彼の先端が自身の疼く入り口にめり込むのを待っている。
——しかし、セドワールがその硬い先端を導いたのは、待ち望んでいた『穴の中』ではなかった。

「っ……え……？」

セドワールは割れ目全体の肉にその熱いペニスをぬちゅう♡と挟み込ませた。穴の奥へと挿入するのではなく、割れ目にその太く長いペニスを挟み込むと、濡れそぼった柔らかいひだやクリトリスを擦り潰すように、前後に腰を動かし激しく擦り合わせはじめる。

「あっ♡♡あんっ♡や…っ♡せんせえっ♡こすこすいや…っ♡♡中に入れて…♡♡♡」

割れ目全体を擦りあげられるじれったい刺激。奥への突き立てを求め悶えるミイを嘲笑うかのように、セドワールはミイの顔に自身の顔を寄せて、意地悪く笑った。

「ほら、っ脚を下ろせ：っ今度は舐だ、我慢を覚えろ」

熱を孕んだ低い声が色気を帯びてそう囁き、腰に絡みついたミイの脚を掴んで無理やり下ろさせた。ミイの両脚が閉じられ、自然とミイの割れ目も閉じてセドワールのペニスを柔らかく圧迫する。

「んう…♡せんせ、やだ、これ…♡」

「煩い…動くぞ」

セドワールは、壁に押し付けたミイの腰を両手でしっかりと掴んで、硬くそり立ったペニスを彼女の割れ目にぴったりと密着させ、腰を前後に大きく動かす。

ぬちゅっ♡ぬちゅっ♡ぬちゅっ♡ぐちゅっ♡ぬちゅっ♡

「あっ♡あっ♡あっ♡おちんぽ、っにゅこにゅこしてる…っ

♡」

先ほどセドワールがぶちまけたばかりの精液と、ミイ自身からあふれ出る熱い愛液が混ざり合い、この上なく淫らで滑らかな潤滑油となっていた。立ったままの姿勢でペニスに跨っているため、ミイ自身の体重がそのまま下へと重くかかっている。そのため、セドワールのペニスはひだの奥へとグッと埋め込まれるように強く押し付けられ、ひだを巻き込み体液を絡ませあいなながら、割れ目の中の肉全体を深く擦り上げていく。

「ああんっ…♡♡あっ♡♡あんっ…♡こんなの、っ…♡中に挿れてくれないのに、♡こんなの♡えっちだよおっ…♡♡ずるいい…っ♡♡」

焦がれる奥ではなく、敏感なクリトリスやひだなど割れ目全体を熱い肉棒でにゅこ♡にゅこ♡と執拗に擦り上げられる。膣や子宮が求めているのに満たされない焦燥感と、精液まみれのままぐちゃぐちゃに擦り合わされる割れ目の快楽に、ミイは甘く蕩けた声を零し続けた。

「……駄に、っずるいも何もあるものか……」

セドワールは望んでいた挿入ではないのに声を漏らし悦ぶミイの浅薄さを可愛らしく思いながら、さらに腰のスピードをはやめ彼女の身体を容赦なく虐め抜いていく。

ぬちゅぐちゅぐちゅぬちゅぬちゅっ♡

「あぁっ♡♡おまんこ、っ♡めくれちゃうっ、♡擦れすぎてっ♡へんになるうっ♡♡」

壁とセドワールの大きな体に挟まれ逃げ場を失っているミイは、快感によって膝が立たなくなり、崩れるように下に体重をかけてしまう。

「っひゃうんっっ♡♡」

ぐちゅう♡と自分の体重により割れ目にさらに深くペニスが押し付けられ、強くなった快感にミイの体が思わず跳ね上がった。

「我慢しろと言っただろう。っ本当に卑しいな、お前は…」

「ちがうっ♡からだが、かってにっ♡♡」

「言い訳をするな。ちゃんと立っているろ」

「あんっ♡あっ♡むりい…っ♡」

セドワールの太く長く勃起したペニスは、割れ目のぬるぬるとした感触にそそられて更に反り返り、その身を上に上に押し

付けようとする。そんな凶暴な肉棒が割れ目のさらに奥深くを
蹴り、敏感な膣口やクリトリスがペニスに押し付けられるたび、
ミイの身体はビクンッ♡ビクンッ♡と激しく痙攣して膝が震え
た。ミイはセドワールの首に回した手に力を入れて必死にしが
みつこうとするが、その抵抗も虚しく何度も体重が下にかかり、
大きな嬌声と共に身体を大きくはね上げた。

セドワールが腰を前後に動かすたび、精液と愛液がぐちゅ♡
ぐちゅ♡ぬちゅ♡♡と、耳にこびりつくような卑猥で淫らな水
音を響かせる。

「っ……、ほら、よく聞くのだ。お前がここに欲しがった精液
が、っペニスを滑らせいやらしく音を立てている……っ」

セドワールは艶やかに口角を吊り上げ、冷たく、それでいて
底なしに甘い意地悪な笑みを浮かべる。

「……本当はこうして外を擦って欲しかったのだろう？だからここに射精しろと強請ったのではないか？」

甘い皮肉と、精液まみれの割れ目をねっとり襲う摩擦に、ミイは快楽で涙を滲ませた。

「ちがうっ♡ただあ…っ♡あっ♡♡っほんとに、おまんこに、♡せーえきっ♡かけてほしかっただけえ…っ♡」

「……ふ、そっちの方が余程淫らだと自分でわかっているのか？本当に、どうしようもない奴め……」

「ううっ♡♡あっ♡だってえっ♡ああんっ♡」

「いいだろう。淫らでどうしようもないお前が悦ぶように、もっと深く擦ってやる」

セドワールは、ただ前後に往復させるだけの単調な動きをやめ、さらに彼女の理性を狂わせるような軌道を描き始めた。上

へ上へとねっとり突き上げては手前に引くように腰を動かし、
カ리를割れ目のひだに深くひっ掛けてそのまま割れ目全体を引
っ搔く。そしてまた幹全体を割れ目にねじ込むように腰をうね
らせる。

ぬっちよ……っ♡ぬっちよ、♡ぬっちよ……♡♡

ただの摩擦ではなく、肉のひだの奥深くまでねじ込まれ、引
っ搔き回されるような立体的な刺激に、ミイの背骨を電撃のよ
うな快感が駆け抜けた。

「ひあんっ……♡♡ああんっ……♡♡あっ、そこ、♡……おく
ちのとこっ♡ぐりってされるの、♡きもちいっ……♡♡かり、ひ
っかかってっ♡♡あっ♡♡おまんこっ、♡きもちい……っ♡♡」
脚を閉じて締まっている割れ目をビンビンの肉棒で無理やり
こじ開けられ、決るように搔き回されるたび、ミイは思考がぶ

つぶつと焼き切れあられない卑猥な言葉が素直に口から飛び出てしまう。膣の入り口をカリで直接かりかりと引っ搔かれる快感に身体は崩れ、まるで更に深さを求めてしまうかのように腰が落ちてペニスにすがり付き、さらなる快感を貪ってしまう。「……これほど扱られてなお、もっと深さを求めるのか?……」お前のここは本当に貪欲なのだな……っ」

セドワールは嬉しそうに色めき立った声を響かせ、ミイの身体を逃がすまいと、その重みとねじ込むような腰の動きを容赦なく加速させていく。ぬっちょ♡ぬっちょ♡と、混ざり合った体液がいやらしい水音を立てる。セドワールは腰を押し付け、今度はガチガチに硬いペニスの根元で、ミイの敏感すぎるクリトリスを何度も押し潰すように下半身を密着させて腰を振った。「だめえっ♡クリっ、♡くりだめえっ♡♡」

ミイは悲鳴の言葉とは裏腹に、更にクリトリスへの刺激を求めてセドワールの腰に向かってヘコヘコと腰を振ってしまふ。セドワールは、甘い悲鳴を上げながら卑しく快感を求める彼女の姿に底知れぬ色気を帯びた笑みを浮かべ、彼女の腰を強く掴んで動きを止めさせた。

「腰を振るな。どれだけ物欲しくても我慢するのだ。躰と言っただろう？」

「やだっ♡やだっ♡おまんこもっときもちくなりたい…♡」

「……ほう、本当に良いのか？その後がどうなっても知らんぞ？」

セドワールは意地悪く口角を上げてそう言い捨てるやいなや、ペニスの太い根元をミイの肉厚な割れ目により強く押し付け敏感なクリトリスをペニスで押し潰すと、そのままガクガクガク

ツと小刻みに激しく腰を震わせ、すり潰すようにクリトリスを擦り上げはじめた。

「あああっ♡だめっ♡♡だめえっ♡♡やだっ♡♡」

「お前が、っ善くなりたいと言ったのだろうが…っ」

「だめなのっ♡♡っこんなのっ♡♡すぐ、いっちゃぐう♡♡っあっ♡♡だめだめだめえっ♡♡イぐからあっ♡♡」

一点を執拗に攻め立てられる強烈な刺激に、ミイの身体は冷たい石壁とセドワールの硬い肉体の間で逃げられずに激しく振れる。セドワールは体重をかけて押し潰すようにさらにミイを壁へと押し付け、容赦なく、ただひたすらに小刻みな腰のピストンを叩き込み続ける。

こりゅこりゅこりゅこりゅ♡♡と容赦なくクリトリスがすり潰され、あまりの快感に頭がチカチカとする。

「だめっ♡♡いっ♡♡いぐっ♡♡イグッ♡♡」

「……っもう果てるのか？」

耳元でわざと意地悪く、掠れた声で囁く。絶頂の淵で頭が真っ白になりかけているミイに、セドワールは嘲笑うような、それだけで狂おしい熱を帯びた瞳を向けた。

「あああっ♡♡だめっ♡♡イクうっ♡♡イグッ♡♡イッちやううっ♡♡」

もう限界だと、涙を流しながら激しく首を振る。強烈な快感に頭の中が明滅し、腰が浮き上がり、絶頂に足をかけ体が震えだした瞬間、セドワールは残酷にもピタッと腰の動きを止めた。あれほど激しくクリトリスを焼いていた摩擦の刺激が、嘘のようにつつりと途絶える。

「あ……!?っ♡♡ああ……っ♡♡♡♡」

急に奈落の底に突き落とされたような、満たされなかった極度の飢えに、ミイの口からは情けない絶望の声が漏れた。まただ。また、絶頂させてもらえなかった。

苦しげに眉間を寄せ、泣き出してしまいそうなミイの惨めな姿に、セドワールの胸の奥で底知れぬ加虐心と独占欲が激しく疼く。

「……果てさせないと言ったではないか」

色っぽく、そしてどこまでも残酷な微笑みを浮かべてセドワールはそう囁いた。

寸止めの地獄に落とされたミイは、耐えられず絶頂を掴み直そうと自らの指を痺れるような熱を放つクリトリスに這わせようとした——が、その指先が触れるより早く、セドワールにガシッと手首を掴まれる。

「……駄目な子だ……。いったい誰が、自分で触っていいと言った？」

耳元で冷たく、しかし熱を孕んだ声でそう咎められ、ミイの背筋はゾクツと粟立った。

「っつやだあっ！やだ、もうっ……おまんこ限界なのっ♡無理、っ……これ以上焦らされたら頭おかしくなっっちゃうよおっ……♡」

大粒の涙をこぼし、すぎるように懇願するミイ。そのあまりの切実さに、セドワールはふっと息を緩め「そうか……」と優しく吐息を漏らした。

その声音に、ミイの胸に一瞬の希望が灯る。——やっとこの生殺しを終わらせて、奥まで挿れてくれるのではないか。

そう期待したのも束の間、その希望は冷酷な言葉によって一

瞬で打ち砕かれる。

「ならば……上を触ってやろう。上なら、まだ限界ではあるまい」

「え……っ？」

戸惑うミイに構わず、セドワールはガチガチに勃起して苦しそうなペニスをぐちゅりと濡れた割れ目から引き抜いた。

抗議しようと「っ、や……！」と口を開きかけたミイの唇を塞ぐように、セドワールはちゅう……♡と吸い付くような深い口づけを落とした。絡み合う熱と体液の匂いの中で、甘い口づけは瞬く間に容赦のない『支配』へと変わっていく。セドワールはちゅう……♡と音を立てながらミイの下唇をねっとり吸い上げると、唇の隙間をこじ開けるように無理やり舌をねじ込み、その全てを味わうように口内の粘膜を隅々まで舐め回した。

逃げようとするミイの舌を執拗に捕らえ、縛り付けるように絡め取っていく。酸素が奪われ、頭がくらくらと白濁していくような心地よい窒息感。意識がふわっと浮き上がり、現実感が薄れていくその瞬間、それを一気に引き戻すように甘美な刺激が胸に走る。

「んっ♡♡んっ♡♡」

セドワールの空いた片手がピンツと硬く尖った左の乳首を捉え、意地悪く弾いた。意識がそこへ一点集中してしまうほどの快感が走り、ミイの身体は石壁に押し付けられたままビクン♡と大きく跳ね上がる。キスで塞がれた唇の隙間から、堪えきれない甘い嬌声が漏れ出すが、ミイがどれだけ苦しそうに喘ぐうとも、セドワールは口づけを緩めない。自身の止めどない欲望のままに、さらに深く、そして容赦なく口内を蹂躪し続ける。

ちゅうっ♡ぢゅるっ♡ぢゅううっ……♡♡

激しい口づけが織りなすいやらしい吸着音が途切れなく耳をも犯す。脳が蕩けるような濃厚なキスの最中も、セドワールは下半身の支配を緩めなかった。一度引いた腰を再度ミイに押し付ける。ビンビンに勃起した熱いペニスをミイの身体にぴたりと触れさせて、その存在を知らしめ彼女を煽りながらも、石壁へと彼女の身体を完全に固定し直す。

そして、ミイを逃れられない状態に固定したところで唇を離れた。二人の唇を唾液の糸が繋ぐ。セドワールは目を伏せてその艶かしい銀の糸を眺めながら、大きな両手をスツとミイの胸元に這わせた。自身の沸き立つ興奮をぶつけその柔らかさを堪能するように乳房を鷲掴みにすると、むにゅう、むにゅうと荒々しくその肉を揉みしだく。そしてそのまま指先を器用に動か

し、左右の乳首をバラバラのタイミングで弄んだ。ピンッ♡ピンッ♡と左右に弾き、先端を爪先でカリカリと引っ掻き、指の腹で強くねじり潰すように摘み上げる。

「んっ♡んあぁっ♡せんせっ、♡乳首っ、いいじしないでえっ……♡♡」

両胸への激しい愛撫に耐えかねて、ミイの身体はビクンビクンと痙攣するように震える。下では焦らされ疼く下腹部にわざとらしくペニスを押し付けられ、上では敏感な胸を徹底的に弄ばれる責め苦に、熱い吐息が漏れ出し、二人の間の空気をさらにねっとり濁していく。

「何故だ？お前はここが好きだろう？」

セドワールは、艶やかな瞳に意地悪な光を宿し、冷たく残酷に微笑んだ。その直後、再び彼の両手の指先が敏感に尖った乳

首を容赦なく転がし、やさしくつねり始めた。

「ああんっ♡♡んうっ♡♡あっ♡♡あんっ♡♡」

溢れるままに熱の籠もった甘い鼻息と情けない喘ぎをはしたなく吐き出し続ける。胸元から全身を駆け巡る電撃のような快感に、ミイは石壁に背中を擦り付けるように体を激しく振り必死に逃れようとする。しかし、セドワールは逃がす気など微塵もない。

「こら……逃げるな」

目を爛々と怪しく輝かせながら、自らの大きな体でミイを完全に押さえ込み、息継ぎの隙間すら与えない執拗な愛撫でその理性を徹底的に粉碎していく。

セドワールの指先で、ピンッ♡ピンッ♡こりっ♡くりくりっ♡きゅう♡とあらゆる遊び方でミイの乳首は愛される。その度

に彼女の体は跳ね上がり、とめどなく声を漏らした。

セドワールはそんなミイの反応を楽しむように乳首を可愛がっては表情を眺めていたが、ふと、その視線を下に落とした。自分だけが見ることの出来る白い双丘の先端で、自分の指の動きに素直に反応する桃色の突起がツンツと勃っている。セドワールはその自分だけが貪ることを許された果実を舐め回すようにじつと見つめながら、低い声で囁いた。

「……可愛い乳首だな。敏感で、こんなにも素直で……実に可愛い乳首だ……」

セドワールは恍惚として胸の突起をやさしく撫でる。その一瞬、激しい愛撫が途切れた隙間を縫うように、ミイは酸欠の肺にめいっばい酸素を送り込むように必死に呼吸しながら、セドワールに懇願した。

「ふっ♡う…っ♡せんせ、っおっぱいっ♡もう…やだあ…っ♡」

「嘯くな…いつも胸を触られると悦ぶではないか」

「でも、っもう、おまんこが…っ♡」

最大限まで焦らされた秘部は、本能的な疼きに逆らうことはできずぐちゅぐちゅに濡れ、ミイは何とか自分で刺激を与えようと両太ももをぎゅっとなすり合わせる。そのあられもない仕草を、セドワールの熱を孕んだ瞳は見逃さなかった。

「…胸をこれほど触られているというのに、そこが疼くのか？」

セドワールは片手をミイの胸からスツと外し、もどかしそうに動く太股のあたりを軽く撫でながら、低く意地悪く微笑む。

「あ…♡そこ…♡」

疼く割れ目のそばにセドワールの手が来るだけでミイの表情は期待に満ち、物欲しそうに声を漏らす。セドワールはその姿を見下ろしながら、彼女の身体を、脳内を、自分が完全に支配しているという事実にはゾクゾクと興奮を覚えずにはいられたかった。

「……本当に救いようがないほどいやらしいな、お前は……」セドワールの手が太ももをゆっくり撫でる度、密着させた下半身の隙間でミイが太ももを何度も擦り合わせ、秘部の悶えに耐えている姿を見て、セドワールは興奮を吐き出すように喉の奥から「はあっ……っ♡」と熱を孕んだ吐息を漏らした。彼のペニスは、ミイと彼の下腹部の間でビクンッ、ビクンッ……と抑えきれない欲情を物語るように激しく跳ね上がる。奥での結合を心から欲しているのは、決してミイ一人ではない。その事

実は二人の間の熱気だけでも十分に明白だった。

「せんせっ、♡せんせいのおちんぽも、びくびくしてるっ……♡おまんこに入りたいって言ってる……っ！」

ミイがもう互いに限界だと言わんばかりにセドワールを見上げながらペニスを強請る。彼の瞳の奥が一瞬揺れた。昼休みのあの瞬間から、彼自身もまた強烈な生殺しを強いられてきたのだ。心の底では、一刻も早くその熱い秘部に自身の肉棒を深く突き入れ、愛しい教え子を貪り可愛がりたいと叫んでいる。本能は、今すぐ彼女の最奥で果てると容赦なく訴えかけていた。

だが――。

秘部や胸をこれでもかと弄ばれ、果てる直前で放り出されて涙目で焦れったく悶えるミイの姿が、どうしようもなく愛おしく、彼の歪んだ征服感をそそってしまふ。

まだ……まだ、足りない――

「……駄目だ」

セドワールはミイの期待を打ち砕き、再び両方の乳首を激しく指先で転がし、愛おしむように、そしていじめるように容赦なく弄んだ。

「あっ♡♡あんっ♡♡もうやだあっ♡♡おっぱいきもちいのっ……♡♡おっぱいばかり、♡おかしくなっちゃうっ……♡♡」
ただひたすらに胸だけを弄ばれる快感に耐えかね苦しそうにもがくミイ。セドワールはそんな彼女のすべてを見逃さぬように見つめながら、自らのなかに渦巻くサディスティックな衝動と、愛おしさの狭間で、さらに執拗に彼女を追い詰めていくのだった。

「気持ちいいか？しかし、胸だけではなかなか果てそうにないな……ふふ、嬢には丁度いい。今日はずっと、夜更けまでこうして胸だけを触っていてやろう」

どこまでも甘美で、そして絶望的な言葉が耳元に落ちる。その言葉の意味を理解した瞬間、ミイの背筋に氷を這わされたようなゾツとする悪寒が走った。——ずっとこのまま。熱いペニスを欲している秘部は置き去りにされたまま、それ単体ではなかなか絶頂に至るのが難しい、しかしたまたまなく気持ちいい乳首だけを何時間も徹底的に愛玩され、終わりになき快感の拷問にかけられ続ける。胸だけで果てそうになっても、きっとその直前でまた手放されてしまうだろう。気持ちよくて堪らなくて達したいのに決して達させてもらえない、果てしない生殺しの地獄が脳裏に浮かび上がった。

「ついやあっ♡♡やだ、もういやあっ……！おっぱいばかりなんて、そんなの無理っ……！おまんこいきたいっ、いきたいっ……♡もう限界なの、っ♡おちんぽ挿れてえっ♡♡」

理性のタガが完全に吹っ飛び、ミイは涙を零しながら、冷たい石壁とセドワールの硬い身体の間で身を振って激しく暴れた。しかしどれほど身体を揺らそうとも、セドワールの体と壁に押しつぶされ、逃げ出すことすらできない。むしろ暴れれば暴れるほどそんなミイの姿を楽しむように乳首を弄ぶ指のいやらしさがじわじわと増し、下半身ではガチガチに硬いペニスがミイの熱を帯びた腹部に擦り付けられていく。

「あんっ♡♡あっ♡おっぱいいやっ♡あっっ♡♡ああんっ♡」
「こら、暴れるな……嫌と言いなながら気持ちよさそうに声をあげているではないか。さあ、その惨めな声をもっと聴かせてく

れ」

セドワールが制止し更に乳首を可愛がるが、ミイは頭をぶんと横に振って喚いた。

「やだっ！きもちくないっ！もうきらいっ！せんせ、なんてきらいっ……！」

泣きじゃくりながら放たれた愛しい女の「嫌い」の言葉にセドワールがひるんだ瞬間、ミイは執念でその隙を突いた。ずるりと、セドワールの強固な包囲網と冷たい壁の間からまるで小動物のように体を縮こまらせて逃げ出す。

「っ……！」

ミイは逃げ出せたものの、限界を超えた快感と疲労で足元はふらふら。外に出れるわけもなく、ただセドワールから逃げようと広い私室をつたなく歩んだ。しかし、その背中にすぐに低

い声が追いつく。

「……待て」

あわてて早足になるミイの後ろを、セドワールは焦ることもなく、まるで逃げ場のない獲物を観察するような余裕を孕んだ足取りでゆっくりと追いかけていく。

火照りきった秘部。ヒリヒリと疼く乳首。愛撫し尽くされて疲れきり感覚がおかしくなった身体では、ほんのわずかな段差すら命取りだった。部屋の一部に敷かれたラグの端に、ミイの足先がふと引っかかる。

「わっ……!!」

「っ!」

重心を崩し、前のめりに床へ倒れ込みそうになったその瞬間。背後からスッと伸びてきた逞しい腕が、ミイの腹をやさしく抱

いた。セドワールがそのまま逃がすつもりはなさそうな力加減で抱き締めようとした瞬間、ミイはすぐさましゃがんでその腕から抜け出す。

「どこへ行くつもりだ、ミイ」

背後に迫る気配に抗議するように、ミイは四つん這いになり必死に床を這いセドワールから遠ざかろうと手足を動かす。

「やっ……こないで……！きらいっ……！！」

必死に逃げ惑うその情けなく可愛らしい後ろ姿を見下ろしながら、セドワールは低く艶やかな笑みを零し、静かに一歩、また一歩と距離を詰めていくのだった。

「まったく……可愛い雛鳥め」

フツと鼻を鳴らして笑ったセドワールの影が、床を這うミイを瞬く間に呑み込んだ。どれほど必死に手足を動かそうとも、

体格差と圧倒的な速度の前では無意味だった。逃げ場を塞ぐように、セドワールは一瞬でその上にのしつと覆いかぶさり、強く抱き締めた。

「私から逃げられるわけがないだろう……？」

耳元に寄せられた唇から、ゾクツとするような熱を吹きかけられる。ミイが小さく「ひう……っ」と身を縮こまらせた次の瞬間、セドワールは彼女の体をひよいと軽々とひっくり返した。

「わっ!？」

何が起きたのか理解する間もなく、ラグの上で仰向けに転がされたミイの視界に飛び込んできたのは、ひどく意地悪く、けれど狂おしいほど欲情に染まったセドワールの顔だった。

そして——その直後。

ズチュウツツ……♡♡!!

セドワールがミイの両膝を掴んで脚を開かせ限界まで濡れ疼いた蜜穴を晒すと、大きく昂った彼の肉棒を一気に突き挿した。
「~~~~っっっ♡♡♡!!」

喉の奥まで熱が駆け巡り、脳髓が激しく痺れるような衝撃。ずっと、狂おしいほどに求めてやまなかった『結合』が、何の予兆もなく、あまりにも勢いよく与えられた瞬間、ミイは声すら出すことができなかった。

「~~~~っっは♡♡あっっっ♡♡」

口を半開きにしたまま焦点の定まらない瞳で彼の顔を仰ぎ見、たまらない快感と衝撃のあまり、そのしなやかな体は弓なりに大きく大きく反り跳ねる。

「っ…く、う…」

長かった焦らしの果てに自身もようやくミイの最奥へと収ま

れた肉棒は、熱く悶えうねるあたたかい肉壁に包み込まれ締めあげられて、セドワールの顔を激しい悦楽に歪ませた。声すら失いただ全身を硬直させて震えるミイの姿に、脳髄を焼かれるような独占欲と加虐心が爆発する。セドワールはわずかに腰を引き抜くと、すぐさま――

ズチュンッ♡♡!!

容赦のない重い突き上げを、ミイの身体を床に押し付けるように打ち込んだ。限界を超えて張り詰めたセドワールの太いペニスが、ミイの膣内の柔らかいひだを容赦なく捲り上げ、敏感なポルチオをゴリュウッ♡♡と音を立てるかのように鋭く抉り上げる。

「~~~~あつつ♡♡あつつ……♡♡♡♡」

目の前がチカチカと明滅し、極限の快感が脳天を突き抜け――

「っ欲しかったのだろうっ？気持ちいいか、ミイ……っこんなに、っ締め上げて……気持ちいいのだろうっ……」

「あゝゝっっ♡♡♡あっ♡♡い……っっ♡♡」

冷徹な教授の面影は完全に消え失せ、底知れない興奮に塗りつぶされただの雄に成り下がったセドワールの声が、絶頂に頭を酔わせるミイの耳を激しく打つ。

彼はビクンビクンと痙攣するミイの腰を大きな手でがっしり掴み、息をする間も与えないほど激しく腰を振った。

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅっ♡♡

「い……っっ♡♡あゝゝっ♡♡あ……っ♡♡っい……るのに、♡♡あたまおかしくなるううっ♡♡」

「な……っしまえ……っ」

ミイの言葉を聞いても、セドワールは責めを一切緩めない。

果てている最中だというのに、容赦なく一番敏感なポルチオを穿ち続ける。全身の神経が焼き切れてしまいそうな快感に、ミイの身体は壊れたからくり人形のように跳ね上がり、その口からどろどろに溶けきったよがり声を漏らし続けた。

その快感に狂い切った惨めで美しい姿に、セドワールの加虐心と愛おしさは限界を超えて爆発する。

「っ……、可愛い……っこうして私に乱され、惨めに果てて……本当に可愛いなお前は……っ」

セドワールは腰を掴んでいた片手をミイの乳房に伸ばすと、そのミイの柔らかい胸の肉を大きな手で鷲掴みにし、むにゅっ♡むにゅっ♡と荒々しく揉みしだいた。

下は凶悪なペニスでひたすら奥を犯され、上はセドワールの興奮具合を表すように、独りよがりに胸の肉を揉みしだかれて

いる。逃げ場のない愛され方。ミイはただセドワールに身体を預け、快感の濁流に溺れるしかなかった。

「あぁっ♡あっ♡あぁんっ♡♡お、♡♡おまんこきもちいっ♡♡あぁっ♡♡」

「ふ、っ気持ちいいか、…っあぁ…っ可愛い…っ可愛い…っ」

セドワールは愛しい彼女のすべてを自らの熱と痕跡で完全に満たそうとひたすら腰を振り、狂ったようにその穴にペニスを突き入れ続ける。

「はぁっ…っ、私も、昼休みからずっと、お前をこうして抱き潰したくて仕方がなかったのだ…」

頭の中を支配していた欲望を吐き出しながら、セドワールはガチガチに硬く反り立ったペニスをミイの熱い肉壺へと激しく出入りさせる。ミイの膣内はまるで生き物のようにセドワール

の肉棒を吸い付き、離さない。あまりの心地よさに、セドワールの低い吐息には熱い歓喜の色が帯びていた。

激しいピストンの最中、セドワールはパンパンに膨れた亀頭で、ポルチオより少し手前、膣のざらざらとした柔らかく膨らんだ箇所を的確に掠め取る。

「っ……、ここも……ここも好きだろう、ミイ……っここも、たまらなく気持ちいいのだったな……っ？」

性感度が高いうちの一箇所を集中的に擦り上げるような、軌道を変えたいやらしい腰の動き。ミイは弱いところを強い摩擦で擦り潰され、正気を保つことなど完全に不可能になっていた。「おあんっ♡♡あああゝっ♡♡♡そこだめえっ、♡だめ♡きもちいっ♡♡きもちいっ♡♡」

脳髓を突き抜けるような快感に、ミイは喘ぐ唇からたらたら

と涎を垂らしながら全身を大きくのたうち回らせる。結合部からはぐちゅぐちゅとさらに淫らな水音が激しく響き渡り、二人の体液と汗が一つに混ざり合う。

理性を完全に焼き尽くす快楽の奔流のなかで、セドワールは狂おしいほどの愛しさと征服感を乗せ、さらに深く、激しく、ミイのすべてを貪り尽くすように腰を突き上げ続けた。

「んあぁっ♡♡あぁんっ♡♡せんせっ♡♡ごほーびっ、♡♡ごほーびきもちいっ♡♡せんせの、おちんぽきもちいっ♡♡せんせっ、せんせっ、しゅきいっ……♡♡」

理性を完全に奪われた頭で、ミイは涙と涎にまみれた顔をぐしゃぐしゃにしながら、愛の言葉を何度も叫び続ける。激しく突き上げられるたびに、ただ快楽を貪るだけでなく、全身全霊でセドワールという存在そのものに縋りついていた。

その無防備で、あまりに甘い愛の言葉に——セドワールの胸の奥で、現実がせり上がってきた。

（……私は、今、生徒を犯しているのだ）

激しく打ち付ける腰の動きが、わずかに緩む。酷い罪悪感が黒い波のように押し寄せてきた。

ミイが自分を『セド』と呼ぶようになってからしばらく経つ。その恋人らしい響きに浸るあまり現実の輪郭を見失いかけていたが、『先生』と呼ばれることで、自分は今教え子を私室で無残に犯している、という実感が湧き上がってきてしまう。

見下ろせば、目の前には自分の凶悪なほどに太く硬い肉棒をその身体に呑み込み、めちゃくちやに掻き乱れされているミイの姿がある。教師という立場にありながら、教え子を自らの手で汚し、快楽のなかに沈めているというまぎれもない事実。

しかしその罪悪感は、冷や水として理性を呼び覚ますどころか、むしろ奇妙な熱を帯びて別の感情へと変貌していった。

ミイからのあまりにまっすぐな愛着。そして、自身もまた、一人の女性としてミイを心から愛している。

互いの愛のもとでは、『生徒をひたすら犯す教師』『教師とのセックスを楽しむ生徒』という罪深さが、最高のエロスへと昇華されていく。

昼に彼女が茶化すように始めた『先生と生徒ごっこ』。いつの間にか二人はこの歪んだごっこ遊びの深みへと堕ちていた。

セドワールは歪んだ笑みを湛え、ぱちゅんッ♡ぱちゅんッ♡ぱちゅんッ♡と肌を鳴らしながら腰を打ち付け、低く掠れた声をミイの耳元に這わせる。

「……教師のペニスを奥底まで啜え込み、そうやって淫らに喘ぐなど……我が教え子ながら、はしたないな、ミイ……」

教師という仮面をあえて見せつけるようなその言葉は、彼女をより深く背徳の泥沼へと引きずり込むための甘い呪詛だった。

「せんせっ♡♡せんせが教えたんだよっ……♡あっ♡♡お、まんこでっ♡おちんぼ、っ♡ど、やって啜えればいいのか、もっ♡せんせが教えたのっ♡♡っあんっ♡♡」

ミイはセドワールの首に両腕を絡みつかせて、自分から彼のペニスを貪るように腰を突き返した。初めて彼に抱かれ彼に染め上げられてからのすべての記憶を誇るかのように、ねっとり甘い愛の言葉を叫びながら彼の身体を呑み込む。

（……私が、この子を、こんなにしたのか……っ）

見下ろすミイの瞳に映るのは、世界で自分だけ。自分が長い

時間をかけて愛し方を教え込み、自分の肉体で快楽を教えたやうな愛しい教え子が、今や全身全霊で自分を求めている。

「っ……く……！」

セドワールの胸の奥で、ドクン、ドクンと激しい鼓動を打つ心臓が、限界を超えた熱を全身に送り出す。ミイの奥底にある子宮口を真っ直ぐに突くたびに、精巢の中がぐるぐると獣の威嚇のように唸り、「今すぐこの奥で果ててしまいたい」という野蛮な本能を剥き出しにした。このあたたく愛しい肉の器に、自分のすべてを注ぎ込みたい。その衝動が腰の動きを狂氣的なまでの速度へと加速させる。

パアンッ！パアンッ！パアンッ！パアンッ！と、肉と肉のぶつかる激しい音が部屋中にこだまする中、セドワールは歪んだ愛おしさを滲ませた笑みを浮かべ、吐き捨てるように囁いた。

「……っならば、褒めてやらんとな……」

ぐちゅぐちゅと蜜壺にペニスを往復させながら、セドワールは蕩けるような熱を帯びた瞳でミイを射抜く。

「……っ愛し方を覚え……っ、こうして、上手にペニスを咥え……っよくできたな、いい子だ、ミイ……っ」

「っせんせ……っ♡♡」

セドワールはその言葉をミイに降らせると、もう一度両手でミイの腰を強く掴み直し、ミイの最奥、子宮口を狙って激しく突き上げた。

「!!」あああんっ♡♡あっ♡♡おくっ、♡♡おぐうつ♡♡だめっ♡♡だめっ♡♡あああっ♡♡」

頭の芯まで痺れるような鋭い衝撃が突き抜け、ミイはひとときわ高い嬌声を上げながら、背中を大きく弓なりにしならせた。

子宮口を熱い亀頭で無慈悲に押し潰すような刺激。ミイの膣内はあまりの快感にひきつけを起こしたように、きゅううつ……♡と猛烈な収縮を見せ、締め付ける。

「ああ……っ♡」

セドワールはそのあまりの密着感ときつさに身悶え、低く短い歓喜の声を漏らした。だが、そこで動きを止める気など毛頭ない。すぐに再び腰を引き、ガチガチに硬く尖った亀頭で子宮口をめがけて容赦ない突き上げを繰り返す。ズチッ♡ズチッ♡と、狭い膣に極太のペニスが無理やりねじ込まれる重い音と、子宮の奥を直接挟まれる感覚が交互にミイの脳を焼いていく。

「だめえっ♡♡おぐっ♡♡あゝゝっっ♡♡あぁっ♡♡だめえっ♡♡」

「っはぁ……駄目では、っないだろう？」

ねっとりと溶けるような、それでいて絶対的な支配を孕んだ
声色で教え込むように耳元で囁いた。

「こういうときは……っちゃんと、気持ちいい、と言うのだ……っ」

甘い指導の言葉と同時に、さらに深く、容赦なくズンッ！ズンッ！と亀頭で子宮口を挟られる。

「あんっっ♡♡あっ♡♡ぎもぢっ、ぎもちいっ♡♡もうむり、♡こわれちゃうっ♡♡ぎもぢいっ♡♡あっ、あっ♡♡」

思考の糸は完全に切れ、ミイはセドワールに教え込まれた言葉ばかりをただただ零しながら、彼の腰の動きに合わせてビクンビクンと全身を震わせ快楽の波に溺れ続ける。

「……っえらいな、いい子だ……。教えたことができたのだから、たっぷりご褒美をやらねばな……。っ」

蕩けるような甘い賛辞を紡ぎながら、セドワールはミイを絶頂へ誘うようなペースへと完全に引き込んだ。

グチュグチュグチュグチュグチュグチュグチュツ♡♡

部屋の隅々にまで響き渡る、卑猥な水音。敏感な子宮口の一点を狙い撃つような容赦のない連続突き上げ。

ズチュズチュズチュズチュ♡♡!!

硬い亀頭が子宮口の中にまで入らんとするようにその身をぶつけ押し込むたびに、ミイの中で絶頂感が吹き出すように湧き上がってくる。

「ああんっ♡♡あ♡♡あっ♡♡あ♡♡ぎもちっ、ぎもちいつ…♡♡もうだめ、いぎそ…っ、♡♡いぐうっ…♡♡♡♡」

ミイが絶頂を口にしても、今度のセドワールは腰の動きを止めることはなかった。寸止めで焦らすことなく彼女の溢れ出る

絶頂の予感をすべて受け止め、その奥底へ熱い肉棒を叩き込みながら、甘ったるく言葉を耳元に浴びせかける。

「いいぞ……そのまま果てろ……っ可愛い顔を見せてみる……」

セドワールのその囁きに引っ張られるようにミイの体はどんどんと絶頂へかけ昇っていった。

「いっちゃぐっ♡♡いぐ、♡ばぐうっ♡♡あっ♡♡だめえっ♡♡イグッ♡♡イグイグイグイグウッ……ッ♡♡♡♡♡」

あまりの快感の濁流に、ミイは目をぎゅうっと強く瞑り頭を左右に振り乱しながら、獣のように身を振って絶叫した。

その反応を逃さずセドワールはさらに腰の角度を深く固定し、ポルチオを激しく執拗に打ち据え続ける。彼女のすべての感覚を自分色に塗りつぶすような、狂おしいまでのピストン。

そして——限界を迎えたミイの身体が、弓なりに大きく跳ね上がった。

「イッグウ………ッ♡♡♡♡!!」

絶叫が掠れた声に変わった直後、ミイの全身がビクビクビクウツ♡と激しい痙攣の波に吞まれる。

「~~~~♡♡♡♡ッあ~~~~ッ♡♡♡♡あ♡♡♡♡♡」

限界を超えた膣内が、まるで生き物のようにきゅううつ……♡と猛烈な収縮をみせ、中の肉棒を逃がすまいとひどく締め付けた。先ほどの不意打ちの絶頂とは違う、自分の意志でセドワールのすべてを受け入れ、昇り詰めた最高の頂点。

「あああ♡♡♡♡イってる……♡♡♡♡でる♡♡、せんせっ……♡♡♡♡」

意識が途切れそうになるような快楽のなかで、ミイは、自分が今最高に満たされて果てているという事実をセドワールに誇示するように何度も甘い声を紡ぎ続けた。

「はあっ……はあっ……！」

セドワールはそんなミイのアクメ姿を見つめ、腹の奥でカッと熱く煮えたぎる熱を吐き出すように息を荒らげた。絶頂でうねるミイの膣内へ、セドワールは容赦なく肉棒を出し入れし、自らも限界まで快感を貪り続ける。精巣が唸るような熱を持ち、ドクドクと重い疼きが這い上がってきた。

「ミイ……っ、ミイ……っ」

「あああゝっ♡♡ああんっ♡♡ぐうゝゝっ♡♡♡」

アクメ中も犯され続け、ミイは重ねて絶頂してしまうのではないかと思うほどの快感に醗く甘美な声を漏らした。

ゆさゆさと自分の突き上げに揺られながら焦点の定まらない瞳を細めて乱れるミイの姿に、セドワールの理性は完全に焼き切れた。教師としての仮面も冷徹な誇りもすべてが吹き飛び、彼女を心の底から愛する男としての本能剥き出しの喘ぎが喉から零れ落ちる。

「ああっ……ミイ……っミイ……私も……っ果てる……っ」

そのみつともなくも甘い告白を聞き取った瞬間、ミイは快感に身を震わせながらもセドワールの首にしがみつき、誘い込むように叫んだ。

「だしてえっ♡♡せんせのせえし、♡♡ぜんぶ、なかに出してえっ♡♡」

愛しい教え子の強請りに吸い上げられるように、セドワールの奥で滾っていた精液が一気に根元から押し上げられていく。

「っ……くっ……!!」

ずちゅうっっ♡♡!!

限界を超えて張り詰めたペニスを最奥まで挿し込み、亀頭でミイの子宮口を無理やりこじ開けたその瞬間——セドワールの射精穴から、熱く煮凝った白濁液が、子宮の中へと叩きつけるように放たれた。

ビュ~~~~~~~~♡♡♡ビュ~~~~~~~~♡♡♡ビュクビュクウツ……♡♡♡ビュルツ♡♡

ドクンドクンと大きく脈打つ肉棒の先から、熱い濁流が何度も、何度も、ミイの最も深い場所へと注ぎ込まれていく。

「っあ♡♡でてるっ、♡♡せんせえの、でてるぅ……っ♡♡」

自分の子宮に熱い粘液がたっぷり注ぎ込まれていく感覚を噛み締め、ミイはこれ以上ないほど幸せそうに声を漏らした。

その言葉にそそのかされるように、セドワールはまだ脈打つペニスをミイの中で小さくねっとり動かす。熱のすべてを余すことなく注ぎ込まんと、ペニスを彼女の狭い膣に擦り付け絞り出すように腰を揺すった。

そして、濃い白濁液をすべてミイの中に注ぎ込み終わると、張り詰めていた緊張の糸がプツリと切れる。

「はあ……っ……」

荒い息を吐き出しながら、セドワールはそのまま、のし……と力なく崩れ落ちるように、ミイのやわらかな体に体重を預けた。

直前までの濃厚な情欲が嘘のように消え去り、そこにあったのは、すべてを出し切った心地よい疲労感と、愛しい者に向ける穏やかな熱だけだった。

セドワールは顔を上げると、ぐったりと横たわるミイの額や頬に張り付いた髪を優しく指で払い、その荒い息を整えないうちにそっと唇を重ねた。

ちゅっ……ちゅうつ、ちゅっ……♡

先ほどまでの貪るような口づけとは打って変わって、優しく互いの唇を食み合うあどけなくて可愛いキスを何度も重ねていく。

「……いい子だったな、ミイ」

汗ばんだ肌と肌が密着した温もりを感じながらセドワールは低い声で愛おしそうに囁き、その小さな背中を優しく抱き締めた。

ミイは熱の残るセドワールの背中に両腕を回し直し、愛おしそうにぎゅっと抱き締め返した。

「先生……大好き……っ♡」

その甘えるような声を聞いたセドワールはふっと小さく息を吐き、腕の力をわずかに緩めてから、ミイの顔を愛おしそうに覗き込んだ。薄紫の瞳には、先ほどのまでの激しい独占欲の残り香と、どこか気恥ずかしそうな優しさが混ざっている。

「……いつまでその『先生』呼びを続けるつもりだ……。私たちはもう、その垣根を超えて、こうしてすべてを分かち合っているというのに……」

どこか拗ねたような、甘えたような響きを含ませて問うセドワール。ミイは嬉しそうに目を細め、上気した頬を緩ませてこてんと首を傾けた。

「……だって、『セド』って呼ぶときはすごく優しく甘やかしてくれるけど、『先生』って呼ぶと、いつものあの怖くて意地

悪で、でもすんごくかつこいい『グレイス先生』が出てきて……ドキドキするんだもん」

その無邪気な理由を聞いたセドワールは、呆れたような、けれどどうしようもなく満たされたような微笑みを浮かべてから、わざと目を細めてミイを睨んだ。

「……では、お前に甘いだけの『セドワール』など、もうお気に召さんということか？」

「！ちがう、そんなことないっ！セドも好きだよっ！」

慌てて首を振ったミイはふふつと楽しそうに笑いながら、セドワールの頬をそつと手のひらで包んだ。

「でも……たまにはこうして『先生』って呼んで、意地悪されるのもいいでしょ？だって『グレイス先生』のそういう顔、私しか見れないんだから……」

甘えを含んだその笑顔に、セドワールは自身の負けを感じて深く息を吐き、愛おしさを噛み締めるように再びその唇へと口づけを落とした。

やさしく互いを食み合い、ちゅ…と音を立てて唇が離れると、セドワールはどうしようもなく愛おしそうに苦言を漏らした。

「……まったく敵わんな、このじゃじゃ馬め」

「ふふ、セドはいつつも私に甘い」

「こんなに可愛らしい子を甘やかさずにいられるものか……」

ミイは嬉しそうに微笑み『教師と生徒』ではなく『セドワールとミイ』として、ちゅっ、ちゅっ、と優しく穏やかなキスを何度も交わし合う。満たされた余韻の中で肌のぬくもりを確かめ合うような穏やかな時間が流れた。

「……ミイ、そろそろ……」

甘やかな時間をたつぷりと過ごし、セドワールがゆっくりと体を起こしてミイのなかに収まっていたペニスを引き抜いたその時――

ミイはセドワールの首に両腕をしっかりと巻き付け、甘く妖艶な笑みを浮かべながら彼を見上げた。

「ねえ、『先生』やだよ……まだ、終わらないでしょ？」

その言葉の意味と、瞳に宿った冷めない熱を察知し、セドワールはほんの少し目を見開いた。

――だが、それもほんの一瞬のこと。

セドワールは我儘で旺盛な彼女に、やれやれ、と呆れるような顔をするが、その瞳の奥には冷徹でサディスティックな光が蘇る。彼は再び、ミイが狂おしく求めてやまない『グレイス先

生』の仮面を完璧に被り直した。

「……これほど散々犯されておきながら、まだ満たされんと言
うのか……？」

ミイは再び『グレイス先生』になったセドワールに、胸をき
ゅんと期待に高鳴らせた。

「うんっ♡先生が、まだ欲しいの……っ」

うっとり♡と熱を帯びた瞳で見上げながら、ミイはセドワールの首に絡ませた腕にキュッと力を込めた。先ほどまで心地よい
気だるさのなかを漂っていたのが嘘のように、再び彼を求める
貪欲な熱がその身体を満たしていく。

だが、セドワールはすぐにはその願いを受け入れず、ぐっと
腰を引いたまま、冷ややかに鼻を鳴らした。

「しかし、何もしていない者にこれ以上褒美などやれんな」

「……先生の意地悪」

頬をぷうっと大きく膨らませて不機嫌そうに拗ねるミイの姿に、セドワールは狡い笑みを深くする。

「ああ、私は元来ずつと意地が悪いぞ。……お前はそれを分か
つていて、私に焦がれたのだろうか？ 違うのか？」

皮肉っぽく、意地悪で、しかしどこまでも色っぽい光を湛えた薄紫の瞳で見下ろされ、ミイは悔しそうにわずかに唇を尖らせた。愛しいこの人の前で、その言葉への反論の余地などどこにもない。

「そうですね……。あーあ、惚れた弱みだっ」

口を尖らせてぷいと顔を背けたミイだったが、その耳たぶや頬は彼への愛に満たされ桃色に染まっている。そんなあまのじやくなミイの反応に、セドワールの胸の奥に溢れる彼女への愛

情がとろりとその薄い唇から漏れ出す。

「惚れた弱み、などと……それは私の台詞だな。お前が可愛いから、こんなごっこ遊びに付き合ってやっているのだぞ？」
低い声音でそう囁きながら、セドワールは可愛がるように頬にキスをする。

「ん……」

ミイは満更でもない顔で鼻にかかった声を出すと、潤んだ瞳でじつとセドワールを見上げて問いかけた。

「……で、何したら続きをしてくれるの？」

その貪欲なまでの催促に密かに愛おしさを覚えながら、セドワールは片方の眉をひそめ、どこか探るような視線を向けた。

「……お前、午後の授業はまともに受けられたのか？」

「え？……なんで急にそんなこと……」

受けられてない。受けられるわけがない。ミイは気まずそうに目を逸らした。

「……そうだろうな。あの有様で授業に集中できるわけがあるまい」

フツと呆れたように息を吐くセドワールに、ミイは少しだけ不服そうに眉間に皺を寄せ、反論する。

「先生のせいでしょうっ！」

「ふふ……ああ、確かに。私のせいだな」

セドワールは低く笑うと、すっと表情を引き締め『グレイス先生』になった。

「ならば宣言した通り、教師として責任をもってその遅れを取り戻させねばならん」

「え……？」

ミイが戸惑った声を漏らすより早く、セドワールはさつさと体を起こした。このままもう一度繋がれると思っていたばかりに、ぽっかりと空いた空虚感にミイが小さく身を震わせるが、彼は淡々と乱れた衣服を整え始める。

「……え、もしかして、今から……!？」

「勿論」

ズボンのベルトを締め直しながら、セドワールは厳格な教師としての表情を浮かべた。

「今日の遅れは今日のうちに取り返さねばならん。……さあ、立つのだ、ミイ。補習の時間だ」

要求した恋人同士の甘い時間とは真逆、まさかの勉強時間の来襲に、ミイは納得が行かない。言われるがまま渋々上半身を起こすが、そのままラグの上にぺたりと座り込み、すっかり整

えられたセドワールの姿を見上げて駄々をこねた。

「やだ！ 明日にしてよ！ 今日はいえつちする日でしょっ！ まだえつちしたい！」

その子どもっぽい抗議に対し、セドワールはふっと片方の口角を上げると、ミイの目の前にスツと片膝をついた。ずり下ろされたミイのブラジャーを引っ張りあげ、ブラウスのボタンを締めて襟元を正してやりながら、淡々と言葉を紡ぐ。

「だから、補習をするのだろうか？」

「……え？」

言っている意味が呑み込めず、ミイはきょとんと小さく眉をひそめ、首をかしげた。そんな無防備な教え子を見据えながら、セドワールは厳格さを含んだ声を落とす。

「……欲しいのだろう？」

「……なにを……？」

「——褒美が、欲しいのだろう？と聞いている。」

わざと遠回りに紡がれた言葉を頭の中で反芻した瞬間、ミイのくちやくちやとこんがらがっていた思考がパツと鮮やかに繋がった。

今ここで彼に従って真面目に勉強をすれば——その『ご褒美』として、またさっきのように熱く抱きしめられ、互いの愛を貪り合うことができる。

「っ……！」

ミイの瞳が期待と欲情の色に眩しく輝き始めた。さっきまでの不満そうな表情はどこへやら、頬を朱に染めながら嬉しそうに口元を緩ませる。

「……いるっ！ご褒美、欲しいです……っ！」

素直すぎるその変化にセドワールは呆れと愛おしさを隠しきれない眼差しを向けつつ、フツと鼻を鳴らして笑った。

「よろしい。では、まずは変身術からだ。」

セドワールは、ミイがいつの日か勝手に本棚に置いた小さなサボテンの鉢とミイの荷物から抜き取った彼女の杖を手し、執務机へと向かった。

「座りなさい」

ミイは促されるままにラグから立ち上がり、執務机の椅子へと腰を下ろす。

——その瞬間、カチカチの木製の座面が直接素肌の臀部に触れ、ミイはハッと息を呑んだ。

（あっ……！）

セドワールに上の服を直されすっかり着衣を整えた氣になっていたが、ショーツを穿き忘れたことを今さらになって思い出す。しかし、セドワールの目には既に教師としての厳格さが宿っており、するりと椅子から抜け出せば叱られるかもしれない。（まあ、いっか……どうせ後でまた脱ぐし……）

なんとも奔放な思考で着衣を諦め、そのまま机に向かって姿勢を正した。臀部からダイレクトに伝わる椅子の冷たさに微妙な居心地の悪さを感じる。

そんなミイの内心など露知らず、セドワールはサボテンの植木鉢をミイの目の前にずいっと押し出した。

「このサボテンを色鮮やかな花の植木に変えてみせろ。さあ、始めなさい」

「はい……！」

ミイは従順な生徒のように小さく返事をする、机の上の杖を手に取った。真剣な表情を作ってみせるものの、座面からスーと伝わってくる冷たさにどうしても意識が持っていけなくてしまふ。

（うう……おしり冷た……っ。でも、ちゃんとやらないとご褒美が……っ）

雑念を振り払うように、ミイはぐっと杖を構え、サボテンに向けて呪文を唱えながら正確な軌道で手首を振った。

ビュンッ！

杖の先端から放たれた白銀の魔法の光が、まっすぐにサボテンへと吸い込まれていく。パツと眩い光が弾け、周囲に微粒子が散らばった——が。微粒子の煙が晴れても、サボテンはサボテンの姿のまま、微動だにせずそこに鎮座していた。変身魔法

は見事に失敗と思われた。

「……………」

セドワールは目を細め不審そうに首を傾けると、じっとそのサボテンを凝視した。そして、よくよくその形状を観察し、絶句した。

「……ミイ」

「ふっ……ふふっ……！」

あまりの珍妙な失敗作に、ミイは思わず口元を押さえて吹き出してしまった。なんと、一見どこにでもあるような緑色のサボテンの真ん中あたりに、おしりの形をした膨らみがぷっくりと成形されていたのだ。しかも、絶妙に柔らかそうな丸みを帯びている。

セドワールは底冷えのする冷ややかな目をミイに向けた。

「……お前、余計なことを考えていただろう……」

セドワールは、教室全体を凍りつかせるようないつもの厳しい声色で、ミイを容赦なく指導し始めた。

「変身学の基礎がなっていない。変身させる姿を強く念じ、それ以外の雑念などすべて脳から消し去らねばならん。グランヴィル先生に習ったはずだが、お前の頭はやはり空っぽなのか？」

「うう……ごめんなさい……」

「今の貴様のように、他のこと——それも勉学に全く関係のないことばかり考えているから、こんな不格好で恥知らずなサポテンが出来上がるのだ。変身術とは魔力だけでなく、何にも動じない強い精神力と、雑念を完璧に削ぎ落とす力が重要になる。いいか？」

「はい……」

正論すぎて一切反論できない上に、目の前にあるおしりサポテンがあまりにも主張激しく鎮座しているため、ミイは肩をすくめて目を泳がせた。

「まずは、その思考の歪みの原因を徹底的に探ることからだ。なぜサポテンがこのような不格好な形になったのか、合理的な理由を考えてみる」

冷静に分析させようとするセドワールに対し、ミイは気まずそうに口を開いた。

「あ、えっと……それなら、もう原因は分かかって……」

「分析が早いのは良い傾向だ。言ってみろ」

腕を組み、回答を促すセドワールを見上げながら、ミイはもじもじと身悶えるようにして小さく呟いた。

「その……パンツ穿き忘れちゃって……さつきから、おしり冷たいなーって思ってた……」

「……………」

セドワールはまさかそんな直球の生理的理由が飛び出すとは思っていなかったのか、完璧に構築していた『厳しい教師』の仮面にひびが入っていく。微かに開いた口の端が引きつり、彼の眉間に深く深く皺が刻まれる。

「……なに？」

あまりに予想の斜め上に行く告白に、セドワールは自分の耳を疑い、思わず聞き返した。しかし、なおも気まずそうにモジモジしているミイを見て、彼女が冗談を言っているわけではないと悟る。

「……穿き忘れた、だと？」

「うん……上の服直してくれたからパンツも履いた気になっちゃってた……」

信じられないものを見るような目でため息をついたセドワールは、視線を机から部屋へと走らせた。先ほどまで激しく乱れ合っていたラグの上。そこには、置き去りにされたミイの下着がぽつんと寂しそうに転がっている。

「……………」

セドワールは呆れ果てたように頭を押さえた。

「馬鹿者……なぜ早く言わんのだ」

「だってどうせ後で脱ぐし……」

「……っ！そうかもしれないが……っああ、くそ……」

すっかり調子を狂わされたセドワールは反論する気を失い、ため息をつきながらラグの上に落ちている下着に歩を進めた。

歩き出すセドワールの背中に、ミイが「あ、せんせ……」と声をかけると、彼は振り返ることもなく、低い声でピシヤリと言いつつ。

「私がつてくるから、お前は余計な口を利くな。……とりあえず、目の前にあるその不格好なサボテンを元の姿かあるいは綺麗な花に変えてみせろ。」

セドワールは落ちている下着を回収するために部屋の中央へと歩いていく。

（まったく、このおてんば娘め……）

やれやれ、とセドワールは身をかめてラグの上に落ちていた小さな布切れを拾い上げた。幾度となく重ねた愛淫の果てもう見慣れている下着だ。それ単体で理性が揺らぐようなことはない——はずだった。昼間からずっと濡らし続けていたのか、

未だにほんのり湿るその布地の濃厚な雌の香りが鼻腔をくすぐる。今しがた汲み上げられたような生々しい匂いに、セドワールの下腹部の奥で、冷めかけたはずの欲がチリッ……と小さく、しかし確実に燦った。

ざわつく胸の裏を厳しい表情で押し隠しながら、セドワールは手にした下着を持って再び執務机へと戻った。

「ほら、これを……」

そう言いながらセドワールは机の上を覗き込み、言葉を完全に失った。

「……………」

そこにあったのは、先ほどまでのおしり型からさらに悪化し、下着を律儀に履かせられたサボテンの姿だった。緑色の丸いふくらみに、絶妙なサイズ感で布が被さっている。

(……なんなんだ、これは)

あまりのシュールさと彼女の精神力のなさに呆れ、セドワールは頭を抱えた。

一方のミイは、大失敗を誤魔化し許されようと、両手を合わせて申し訳なさそうに「えへ……」と可愛らしく笑ってみせる。

「……ミイ」

セドワールは手に持った下着を机の端に置くと、ジロリと彼女を睨みつけた。

「なぜサボテンに下着を穿かせる必要がある？」

呆れ果てた声音とは裏腹にセドワールの心のうちは、思考をうまく統制できないこの教え子の不器用さにもはやどうしようもない可愛らしさすら感じていた。

「いや、その……先生が私のパンツ拾ってきてくれるの見てたら、なんか急に恥ずかしくなってきたちゃって、頭がわちゃわちゃになって勝手にこうなっちゃって……」

ミイは恥ずかしそうに頬を染め、しおらしくしゅんと肩を落とした。セドワールはミイのその姿を見て、小さくした身体を抱きしめやさしく頭を撫でてやりたくなった。しかし、勉強においてこうしてすぐに絆され甘やかしてしまうのはこの子のためにならない、と、自分を律するようにぐっとわざと眉を釣り上げて厳しい顔をし、腕を組んだ。

「……お前の感受性が類まれなるほどに豊かなことは大いに誇るべき点かもしれんが、変身術においては、それが最大の邪魔になっている」

セドワールは厳格な教師の顔でミイを真っ直ぐに見据える。

「変身の成否は、術者の精神状態に直結する。その無駄に奔放な思考を自分で上手く統制し、必要なときは一切の雑念を捨てて心を無にすること、そして変身させる姿を強く念じ続けること——そのどちらもができなければ、いつまで経っても変身術など上達せんぞ」

「はい……ごめんなさい……」

セドワールの正論にミイはうな垂れ、パンツを穿かされたシユールなサボテンを見つめた。

そんな反省の色を見せる教え子の姿に、セドワールはふつとわずかに表情を和らげると、諭すような、しかしどこか含みのある低い声で言った。

「……いいか。お前はまず、その余計なことで溢れかえる脳内を自分でしっかりと制御し、感情に振り回されないための精神

修練を重ねるべきだ」

「精神修練……？」

「ああ。今日は杖の振り方や呪文の発音、もっと高度な呪文式といった具体的な手法の指導よりも……基礎である『思考の統制』そのものの修練を重ねるべきだと判断した」

ミイは何をやらされるのだろうとどこか不安げに「はい」と小さく頷く。

「では、こちらを向け」

ミイは素直に従って椅子ごと身体を回転させて、セドワールと正面から向き合う姿勢をとった。

「お前がやるべきことは、先程と変わらん。そのサボテンを元の姿に戻すか、あるいは綺麗な花に変えてみせることだ」
「ほんとにさっきと一緒」

ミイが驚いたように呟くと、セドワールは彼女の目の前に人差し指を突き出し、厳しい表情をした。

「いいや、大違いだ。今から私が、それを徹底的に邪魔しにかかる」

「えっ……？」

「変身術の実践時というものは常に周囲からの妨害や、己の中の雑念といった『邪魔』が入る過酷な環境なのだ。それに打ち勝ち、どんな状況下でも心を無にして目的のイメージを強く貫くこと。それができなければ意味がない」

セドワールは数々の修羅場を超えてきた屈指の魔法士らしく言葉を紡ぎ、その強い瞳で彼女を逃がさないように捉えた。

「——さあ、雑念だらけのその脳味噌で、私の妨害を跳ね除けてみせろ。始めなさい」

ミイはよく分からないながらも、「要はこのサボテンを変えればいいんでしょ……！」と自分を奮い立たせ、再び杖をしっかりと握りしめた。目の緑の塊を鋭く睨みつけながら、（無心……無心……何も考えない、サボテン、サボテン……！）と心の中で、自分に言い聞かせるように必死に唱え続ける。

しかし、その集中を遮るように、杖を持っていない方の手がふわりと持ち上げられる感覚がした。

「え……？」

思わずそちらへと視線を移したミイの目に飛び込んできたのは、驚くべき光景だった。

そこにいるのは、おとぎ話の絵本に出てくるような、きらきらとした純白の衣装に金髪を揺らす王子様ではない。漆黒のローブに身を包み、長い黒髪を揺らす、影のある美しい魔法薬学

教授——セドワール・グレイス。セドワールは片膝をついて跪き、ミイの手首を優しく、しかし逃げられない強さで掴み上げると、その指先にゆっくりと自身の唇を寄せやさしく口づけを落としたのだ。

(……かっこいい、………)

漆黒の衣をまとった『闇の帝王』のような彼が、自分に跪くようにして指先に愛を捧げている。そのアンバランスさと圧倒的な美しさに、ミイはすっかり心を奪われ、うっとりとその目を伏せた顔に見とれてしまった。

だが、甘い余韻に浸るのもつかの間。

セドワールはふっと唇を離すと、ゆっくりと睫毛を上げ、濡れたような黒い瞳でミイを真っ直ぐに見据えた。そして、艶やかな声で容赦なく言い放つ。

「……邪念を消せ」

「はっ……！」

セドワールの指導に現実に取り戻され、ミイは慌ててパンツを穿かされたままのサボテンに視線を戻した。

（そっか……！ 邪魔って、そういうことかぁ……っ！）

ただ脅されたり攻撃される妨害ではなく、大好きな人に触れられ、甘い毒を盛られて心を揺さぶられること。これこそが彼女にとって一番の、そして最も残酷な邪魔だった。ドキドキと早鐘を打つ胸の鼓動をどうにか落ち着かせようと必死になりながら、ミイは震える手で杖を振る。

「っ……！！元に戻って……っ！」

パッと光が弾けたものの、微粒子の煙が晴れて現れたのは花ではなく、相変わらずのサボテンの姿。しかもそのてっぺんに

は、帝王のようなセドワールを思い出させる鈍色の小さな王冠がちょこんと乗せられていた。

「むりだよお……こんなの……!」

あまりの難易度の高さにミイは思わず泣き言を漏らした。嫌いな人や怖い人相手ならまだしも、心の底から愛している、この身も心も狂おしいほど求めている人が自ら色香を振りまいて邪魔をしてくるのだ。彼のことを無視し、考えるな、なんて、これほど難易度の高い特訓があるだろうか。これはもう精神修行を通り越して拷問ですらある。

（でも……!これを乗り越えなきゃ、『ご褒美』はもらえない……っ!）

ここで諦めたらあの甘く熱い続きはお預けになってしまう。脳裏に染み付いた快感の記憶を燃料にして、ミイは両頬をパチ

ンと叩き気合を入れ直した。

「もうっ……もう絶対、惑わされないんだから……っ！」

再びぐつと杖を強く握りしめ、視線を鋭くする。サボテンに意識を一点集中させようとしたその瞬間――。

今度は、足のつま先がスツと持ち上げられる感触が伝わってきた。

（見ない……見ない！サボテンだけに集中……っ！）

ミイは必死に視線を固定し、机の上で王冠をちょこんと乗せたまま鎮座するサボテンに全意識を注ごうとした。しかし、下半身から伝わってくる感覚は、彼女の強固な決意を嘲笑うかのように容赦なく脳を揺さぶる。

ちゅっ……

静かな私室に可愛らしい音が響いて、ミイのつま先に柔らか

いものが優しく触れた。それは他でもないセドワールが、まるで忠実な従者のように深い愛と独占欲を込めて落としたキスだった。

（うそ……セドが、私のつま先に……っ）

プライドが高く、絶対的な権威と冷徹さをもって周囲を威圧するあのセドワール・グレイスが、今、自分の足元に跪き、つま先に熱を注いでいる。そのあまりのギャップと、自分に向けられた重い愛の形に、ミイの胸は締め付けられるような甘さに震えた。集中しようにも脳内はセドワール一色に染め上げられて、次の彼の動きに思考が囚われてしまう。

ミイの華奢な足首を包み込むように這っていたセドワールの手が、柔らかな皮膚をなぞるように、する……、と上へと移動していく。そして、先ほどのか細いつま先よりも広くなった面

積を楽しむようにより唇を密着させて、ちゅう……と、ミイの足首にあたたかい唇が押し付けられた。素肌に直に伝わるその温もりと、セドワールの吐息の湿り気が、思考を完全に崩壊させていく。

（っ……もう無理！こんなの耐えられるわけがないっ！）

ミイはこれ以上耐えきれず、足元へと声を零した。

「せんせい……むり……っ、こんなのされて、集中できるわけないよお……っ」

恥ずかしさと愛おしさが混ざり合った顔で見下ろしながら、ミイはセドワールが掴んでいる足と自由な足をもじもじと擦り合わせるように動かした。その脚の艶めかしさを見せつけるような無意識の仕草が、先ほどからセドワールの腹の奥でくすぶり続けていた欲の火種に、油を注いだ。セドワールは薄紫の

瞳を暗く濁らせ、自由な方の足首を掴んでミイのその擦り合わせをやめさせると、先ほどキスをした足首よりもさらに上——
ふくらはぎの下部へと唇を近づけた。

っちゅう……っ♡

密着させた柔らかい唇でその白く滑らかな肌をねっとり吸い上げるように味わう。

「ひう……っ♡」

皮膚に走る甘い痺れと、セドワールの唇から与えられた扇情的な湿り気に、ミイの口から思わず嬌声が漏れた。

セドワールはゆっくりと顔を上げ、欲に濡れた瞳のまま椅子の上のミイを見た。その唇には、教え子を翻弄する快感に歪んだ底意地悪くも美しい笑みが張り付いていた。

「……何をしている、ミイ？」

低く掠れた色気を帯びた声が響く。

「集中できない状況でこそ、己の精神を統制し、集中する鍛錬だと言っただろう？……ほら、早くその不格好な植物をどうにかしてみせろ。」

「ううっ……！」

真っ赤に染まった顔をさらにくしゃつと歪め、困り果てたように眉を八の字にしながらも、ミイは震える手で再び杖を強く握り直した。

セドワールの言うままに健気に頑張ろうとする姿に、セドワールの胸の奥で愛おしさとサディズムが湧き上がってくる。

「……いい子だ」

地を這うような声音で褒めとも脅しともつかない言葉を落とすと、セドワールは再び熱を帯びた視線をミイの脚へと落とし

た。先ほどキスをした場所から、さらにふくらはぎの少し高い位置へと、標的を移していく。

っちゅう……♡……くちゅう……♡

肌を吸い上げ、更に、密着させた唇のなかでねっとりとし舌先をその滑らかな肌を這わせ、味わうように撫でる。じつとりと舐め回すような淫らな口づけに、ミイはぞく々と肌が粟立つような悦びを感じた。

「っっ♡……あ、♡」

あまりのいやらしさに眉がとろんと下がる。それでも、ここで負けたらご褒美は与えられない。きつとまた先程のように生殺しにされ続ける。そんなのは耐えられない。

ミイはその執念だけで、どうにか振り絞るように杖を突き出した。

「……っ、元に戻れっ……！」

ビュンッ！

光が弾けたその直後、サボテンの変化を見届けようとじっと見つめていたミイは絶望した。サボテンの胴体の下に、自分の脚と同じような形の緑色の『脚』が生えてしまった。

「っもう……なにこれえ……っ！」

元に戻すどころか更に奇怪な代物を作り出してしまった絶望感に、ミイは泣きそうになる。

「こんなの……一生この鍛錬終わらないよお……っ」

弱音を漏らしながらも、セドワールの大きな手がふくらはぎからさらに上、膝の裏へとゆっくりと這い上がってくる気配を感じ、ミイの心臓は期待に脈をはやくした。

セドワールはミイの泣き言などまるで関係ないともいいうよ

うに、身勝手に、そしてよりいやらしく彼女を追いつめていく。今度は先ほどまで唇を這わせていたふくらはぎの少し上、膝の皮膚へと顔を寄せた。

「あ……♡」

再び甘ったるく唇が触れる予感に、ミイはつい待望の声を零した。セドワールは脚を片手でしっかりと固定し、ぬら……と長い舌を突き出した。そしてそのまま、膝を下から上へ、れろお……つと、ねっとり湿った軌跡を描いて舐め上げる。

「ひううつ……♡」

腰がざわめき立つほどの悦びに、ミイは雛鳥が鳴くようにか細い悲鳴を上げて杖を両手で握りしめ、セドワールを見つめてしまっていた。

可愛い反応に加虐心を刺激されたセドワールは、まるで生贄

を慈しむかのように、ミイの膝をさらにれろお、れろお、と執拗に舐め回す。そのあまりの背徳的な感覚にミイの意識は蕩けかけて、無意識に強ばらせていた両脚の力がふっと抜け、内股にしていた脚が緩んだ。

膝を舐め上げていたセドワールは脚の力が抜けたその揺れに反応しふと顔を上げると、曲がった膝の向こうに焦点があつてしまった。制服のスカートの裾、その向こう側に広がる、薄暗い闇。そこに視線が吸い寄せられた瞬間、セドワールの脳裏に鮮烈な事実が蘇る。

（……そうだ、この子は下着を穿いていないのだった……）

いま自分が舐め上げているこの脚のすぐ延長線上には、布一枚の隔たりもなく、火照りきった秘部が、無防備に剥き出しの

ままで、そこにある。

その事実を思い出した瞬間、先ほどまでの教師の厳格さなど木端微塵に吹き飛ばすほどにドロドロとした色欲が沸き立ってきた。

「はあ……っ……」

その色欲を吐き出すように、セドワールの口から熱く湿った吐息が漏れた。

その熱を帯びた息がミイの無防備な素肌——露出した太ももの内側に触れ、ミイは「ううっ……♡」と小さく愛らしい悲鳴を上げてピクンと身体を揺らした。

セドワールはその怯えたような、それでいてどこか甘く誘うような可愛い反応にあてられ、脚を掴んでいた手に力を入れて少しだけ、しかし確実に、脚を左右に開かせる。そしてその隙

間に顔を滑り込ませるようにして、セドワールはまず膝の内側へとちゅっと柔らかいキスを落とした。さらにそこから一切の躊躇なく、ほんの数センチ上、柔らかい内ももの下部へともう一度ねっとり唇を密着させる。

「あ……っ♡んっ……♡」

セドワールの顔が自分の膝の間に割り込み、一步、また一步と、最も淫らな核心へと近づいてくる。その逃れられない支配感と期待に、ミイの身体は芯からとろりと溶かされていった。じゅく……♡と、内側から溢れ出した愛液が秘部を熟れさせ、甘い疼きが全身を駆け巡る。下着を穿いていないせいで、自分のなかが今どれほど無防備に濡れ熱を帯びているかがセドワールに伝わってしまいそうで、ミイは唇を軽く噛んだ。

（そんなに近付いたらまた濡れてるってバレちゃう……っ♡）

ミイは火照った瞳でどこか焦ったように、自分の膝の間に収まったセドワールの美しい顔を見下ろした。もう一瞬たりとも目を離すことができない。

そんなミイの期待と怯えが入り混じった反応を、セドワールは逃さず捉えた。彼はゆっくりと顔を上げ、ミイの熱に浮かされた表情を見上げる。普段宝石のような美しさを持つ薄紫の瞳は、ミイへの剥き出しの独占欲と愛欲で暗く濁っていた。

「……何を期待している、ミイ？」

耳元で囁くような甘い声が、私室の空気を震わせる。ミイはきゅつと唇を結んだ。

セドワールは意地悪く、しかしどうしようもなく愛おしそうに口角を釣り上げると、ミイの膝をさらに左右へと押し開いた。スカートを、その最も隠すべき箇所が見えるか見えないかのギ

リギリの境界線まで、意図的にぐつとたくしあげる。そして無防備に晒された白い肌に見とれながら、先ほどまでキスを重ねていた場所からさらに上、柔らかく敏感な内もの中盤へと、セドワールはそつと顔を寄せた。長い舌をぴったりくつつけると、そのまま下から上に這わせ、れろ……と、ねつとりと舐め上げた。

「あ……っ♡」

ミイの口から甘い嬌声が零れ落ち、ぴくん、と突き出すように小さく腰が揺れた。

その瞬間、より距離の近付いたミイの無防備な秘部から、甘く、そして生々しい、濃厚な雌の香りがセドワールの鼻腔をくすぐった。先ほどの激しいセックスの名残と、期待のよって溢れ出した蜜の匂いは、指導という目的のため一度取り戻したセ

ドワールの教師としての自制心を一瞬で焼き切るには十分だった。

「っ……はあ……」

セドワールの吐息が一段と荒くなり、高鳴る鼓動が激しさを増す。それに呼応するようにスラックスに包み込まれたペニスがビクリと跳ね、確実な膨らみを持ち始めた。

（これほど、官能的な匂いをさせて……）

漂う艶かしい雌の匂いに誘われるように、そのままスカートの中の薄暗い空間へとすっと鼻を滑り込ませる。

すん……

微かに鼻を鳴らし、その場所の匂いを深く吸い込む。

「やつ……!? やだ……っ！ 匂い嗅がないで……っ♡」

ミイは恥ずかしさのあまり両手で顔を覆い、身悶えるように

身体を震わせた。

セドワールはゆっくりとスカートの中から顔を上げると、爛々と興奮に揺らめく瞳で、真っ赤になって涙を滲ませているミイをじっと見上げる。その唇の端には底意地の悪い笑みが浮かんでいた。

「……指導の最中だというのに、女の匂いを剥き出しにして教師を誘惑するなど……本当にお前は救いようのないほど悪い生徒だな」

責めるように囁きながら、セドワールはその美しい顔をミイの秘部へと再び近付けていく。彼はミイの脚をぐつ、とさらに左右へと押し開き、その膝の間に自身の大きな体を割り込ませた。そしてスカートの端を摘み上げると、ミイの腹側へとたくし上げる。布の守りが無くなったことで、薄暗い影の中からミ

イの最も淫らなところが無防備にその姿を露わにした。セドワールがさらに足を開かせたせいで、中の粘膜の肉感までが隠すことなく見えてしまっている。そこは止まらない発情によって淫らに充血し、とろりと蜜を零している。粘膜の核心——きゅっと窄まった小さな穴は、主人の帰りを待ちわびるかのように、赤く火照り、物欲しそうにひくついていた。

その扇情的で美しい極上の光景を目の当たりにし、セドワールの喉の奥から低い唸りが漏れ、息はさらに荒く、熱を帯びて乱れていく。今すぐその誘う花卉に顔を埋め、しゃぶり尽くしたい。猛烈な衝動が全身を駆け巡るが、セドワールはそれをギリギリのところで押しとどめた。あえて、すぐ目の前にある核心を焦らすように——

セドワールは自身の長い黒髪を片手でさらりと耳にかけ、熱

を帯びた視線をミイに固定する。彼女をさらに精神的に追い詰める狂おしく欲情させるために、セドワールはあえて割れ目そのものではなく、秘部のすぐ脇の柔らかい皮膚、大陰唇へとその顔を寄せた。そしてそこに唾液で湿った舌を這わせ、じつとり舐め上げる。

「うううっ……♡♡あ、あ……っ♡」

最も敏感な場所のすぐ側を襲ういやらしい刺激にミイの身体はビクンッと大きく跳ね上がり、情けなく甘い声を漏らした。舌が這いずったすぐ横を同じように舐められる想像をしてしまい、きゅん々と秘部が疼く。

脳を直撃する濃厚な雌の匂いと目の前で身悶える教え子の艶姿にセドワールの全身は興奮で染め上げられ、ペニスがスラックスの中で窮屈そうに更に膨れ上がっていく。理性のタガが完

全に外れるその寸前、セドワールは荒く息をしながら、もう一度その剥き出しの割れ目へと視線を真っ直ぐに向けた。目前に晒された無防備な割れ目をじっくりと見据えながら、底知れぬ独占欲と色欲に満ちた思案を巡らせる。

（……どうしたらこの子は一番悦ぶ……？このひだを余さず口を含み、たっぷりと吸い上げるか、それとも、この膨らみ切った核を、執拗に舌先で転がしてやるか……）

頭の中は、彼女をどうやって快感の泥沼に沈めてやろうかという恋人としての奉仕心と、期待に満ち満ちた彼女を放置して焦らしたいサディスティックな黒い欲望に塗りつぶされている。今すぐにその割れ目をしゃぶり尽くしたいのを堪え、あえてすぐに口づけず焦燥感で彼女を追いつめていくこともまた、セドワールにとって最高の愉悦だった。

しかし、その焦らしは限界を迎えた彼女によって強制的に終わりを迎えることになる。

ミイは、セドワールの唇が今度こそ自分の最も敏感な場所に触れるのだと信じ込み、待ち構えていた。しかし、いつまで経ってもただじっと見つめられるだけで、触れてくれない。寸前のところを焦らされ続け、くらくらするような酷い焦燥感を覚えていた。もはや彼女の頭の中に「変身術を練習せねばならない」という義務感是一片も残ってなどいない。カラン、と乾いた音を立てて、ミイは手にしていた杖を机の上に放り投げた。そして自由になった自らの両手のひらを割れ目のすぐ隣の秘唇に這わせる。ぐにゅ、と柔らかい肉を手のひらで軽く掴み、まるでその淫らな中身をさらに深く見せつけるように、自らの手で左右へと力一杯押し開いた。

「せんせえ……っ♡たべて……っ♡♡」

自ら割れ目を広げ、赤く充血した粘膜や物欲しそうに窄む穴を無防備に晒し出す。あまりにも淫らな自発的誘惑。

「っ……っ……！」

ミイの余裕のない声色と、目の前に差し出された魅惑的な熟れた果実。そのすべてが、セドワールの中でかろうじて保たれていた理性のダムを一気に決壊させた。

もう、衝動を抑え込むことなどできるはずもない。

セドワールは彼女が自ら開いた肉の割れ目に迷いなく顔を埋めた。